

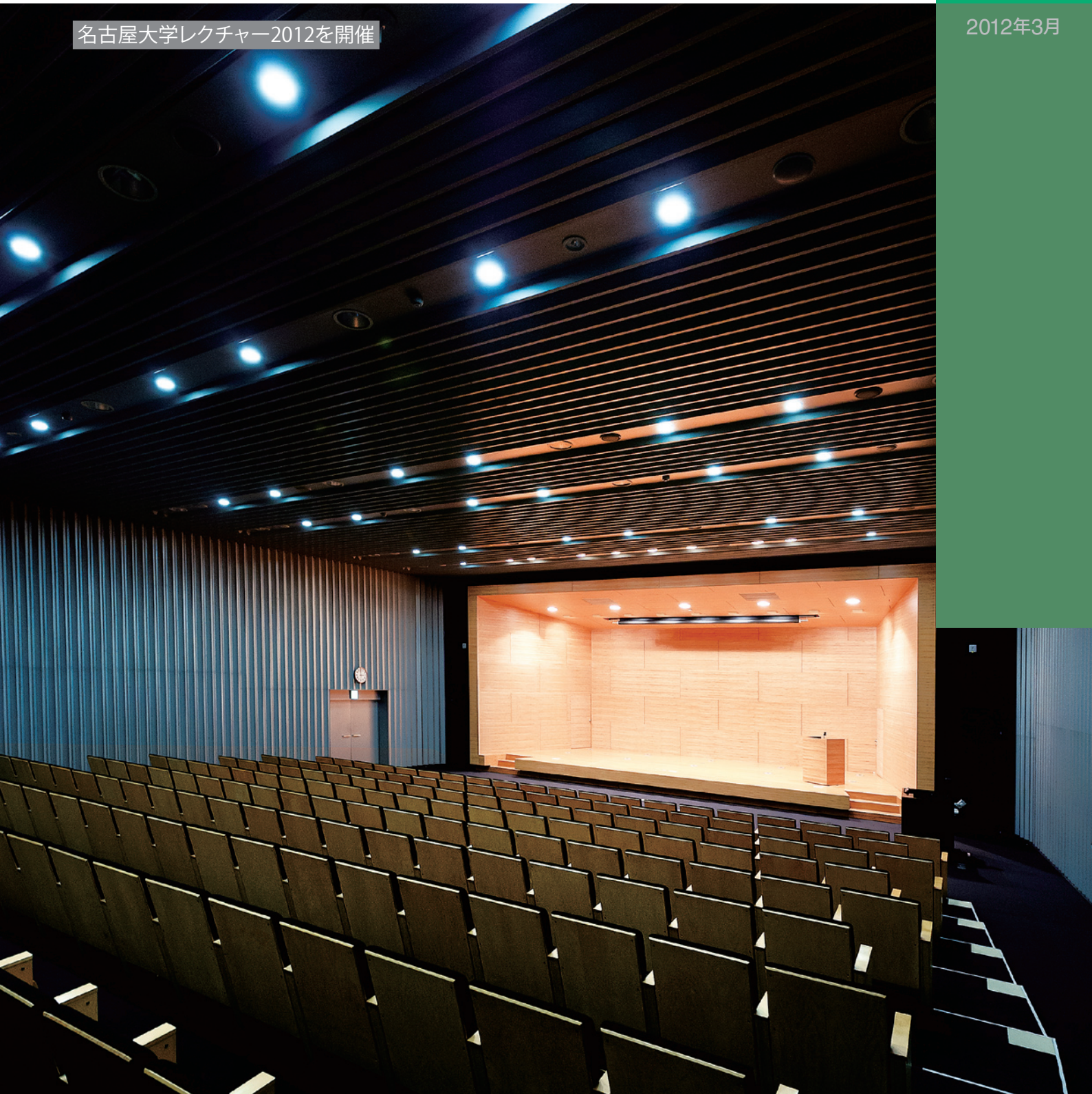
# 名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.226

2012年3月

名古屋大学レクチャー2012を開催



## 目次

●ニュース	
名古屋大学レクチャー2012を開催	3
第5回8大学産学官連携関係本部長会議を開催	4
講演会「研究室からマーケットへ～R&D/テクノロジーの商品化～」を開催	4
平成24年度名古屋大学入学試験を実施	5
第35回経営協議会を開催	5
第77回防災アカデミーを開催	6
●知の未来へ	
法をめぐる「なぜ」	7
松中 学（大学院法学研究科准教授）	
●知の先端	
セマフォリンによる細胞の形の制御機構解明	8
高木 新（大学院理学研究科准教授）	
●部局ニュース	
第2回 CAMPUS Asia 法学院長・学部長会議を開催	10
平成23年度「法整備支援の研究」全体会議を開催	10
講演会「ウズベキスタンを取り巻く経済・国際情勢」を開催	10
第14回名古屋ビジネスセミナーを開催	11
東海がんプロフェッショナル養成プラン平成23年度市民公開講座を開催	11
看護臨床実習交流プログラムを実施	12
シンポジウム「福島原発事故をめぐるコミュニケーション」を開催	12
「環境と映像広告」シンポジウムを開催	13
太陽活動と気候変動の関係に関する第2回名古屋ワークショップを開催	13
文部科学省先端研究施設共用促進事業国際シンポジウムを開催	14
ICCAE 2011年度第9回オープンセミナーを開催	14
予防早期医療創成センター第2回ワークショップを開催	15
第3回体験ワークショップ「石器から学ぶ文化と自然」を開催	15
●定年退職される教授のことば	16
●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成24年1月16日～2月15日	29
●イベントカレンダー	33
●名大トピックスの表紙で綴るキャンパス建物の内部	34
●ちょっと名大史	
第12代総長 <small>ひらの しんいち</small> 平野真一 ― 名大をひきいた人びと⑩ ―	36

# 名古屋大学レクチャー2012を開催





- 1 | 2 | 3
- 1 | 2 | 3
- 1 会場の様子
  - 2 レクチャーシップの表彰楯を手にするキーン博士（右）と総長（左）
  - 3 講演する鳥越博士



名古屋大学レクチャー2012「日本文学と日本文化をめぐって語る」が、2月11日（土）、豊田講堂において開催されました。

同レクチャーは、本学が主催する重要な講演会の一つで、分野を問わず、世界的に高名な研究者の講演を広く一般の方々に公開し、現代世界の最高の「知」に触れていただくために行われるもので、講演者には、名古屋大学レクチャーの称号及び表彰楯が授与されます。

7回目となった今回は、日本文学研究の第一人者であり、文化勲章受章者のドナルド・キーン コロンビア大学名誉教授を招きました。キーン博士の功績は多岐にわたりますが、能・狂言・人形浄瑠璃・歌舞伎などの演劇を文学史に組み入れ、文学をはじめ日本文化全体について極めて優れた言論を展開してきました。

当日は、まず濱口総長があいさつを行い、その後、安藤高等研究院副院長

が、レクチャーの趣旨と講師であるキーン博士、鳥越文蔵早稲田大学名誉教授について紹介しました。次いで、鳥越博士が、「日本文化における芸能」と題し、キーン博士との親交のエピソードに触れながら、浄瑠璃「曾根崎心中」等に関する博士の業績について紹介しました。鳥越博士は能、狂言、浄瑠璃、歌舞伎研究の第一人者で、現在早稲田大学演劇博物館顧問を務めています。

続いて、キーン博士が「世界中の日本文学」と題し、日本文学が翻訳を通じていかに世界に広まってきたか、また世界の文学とともに日本文学がいかに発展したかについて、自身の研究生生活を振り返りながら話し、日本書記から村上春樹までの日本文学の歴史やその魅力について分かりやすく解説し

ました。

その後、名古屋大学レクチャーの称号の授与式及び表彰楯の贈呈式が執り行われました。総長からキーン博士に「聖人が現れ、平和で学問が尊重される世の中になる前兆」とされる「麒麟」をモチーフにデザインされた名古屋大学レクチャーシップの表彰楯が贈呈されました。

最後に、高等研究院アカデミー会員である佐藤彰一文学研究科特任教授によるレクチャー全体の総括があり、大盛況のうちに終了しました。

今回は、本学教職員、一般の方々など1,000名以上が参加し、熱気溢れる講演会となりました。参加者からは、「感銘を受けた」、「心に響く講演でした」などといった感想が多数寄せられました。

## 第5回8大学産学官連携関係本部長会議を開催

第5回8大学産学官連携関係本部長会議が、2月13日(月)、野依記念学術交流館において開催されました。同会議は、厳しい経済情勢の中ますます重要性を増していく産学官連携に関し、主要大学が一堂に会して相互の連携を深めることを目的としており、今回は、本学を当番大学として開催しました。



会議の様子

会議には、北海道大、東北大、東京大、東京工業大、京都大、大阪大、九州大、本学から産学官連携関係本部長及び関係者が、文部科学省から橋爪 淳科学技術・学術政策局産業連携・地域支援課大学技術移転推進室長、経済産業省から進藤秀夫産業技術環境局大学連携推進課長、特許庁から加藤 幹総務部企画調整課課長補佐(活用企画・人材育成担当)が出席しました。

産学官連携推進本部長を務める宮田理事のあいさつに続き、橋爪室長から「産学官連携の戦略的展開について」、進藤課長から「産学官連携現状と今後の施策の方向性について」、加藤課長補佐から「大学等の知的財産活動について」と題した講演があり、各大学から今後の産学官連携の課題等について意見が出され、各省庁も交えて活発な議論が行われました。

また、会議終了後には懇談会が行われ、和やかに終了しました。

## 講演会「研究室からマーケットへ～R&D／テクノロジーの商品化～」を開催

講演会「研究室からマーケットへ～R&D／テクノロジーの商品化～」が、1月26日(木)、ベンチャー・ビジネス・ラボラトリーにおいて、名古屋アメリカンセンターとの共催で開催されました。

講師のロヒト・シュクラ氏は、自身も起業家でありながら世界各国で何百ものビジネスに助言を行ってきた実績を



講演の様子

有しており、現在は米国政府の研究機関で生まれた研究成果の事業化をサポートする組織であるラルタ・インスティテュートのCEOを務め、特に創業したばかりの企業と大企業や大学との橋渡しに携わっています。

講演会では、本学の教職員・学生のほか、他大学教員や一般企業などから約40名が参加し、まず渡邊明彦産学官連携推進本部起業推進部長からシュクラCEOの紹介がありました。

シュクラCEOは、研究機関発の事業を成功させるためには、長期に渡り忍耐強く取り組む必要があること、加えて既存の大企業とパートナーングを結ぶことが重要であることを強調しました。そして、既存企業とのパートナーングのための具体的方策として、技術の優位性を明確にすること、既存企業・顧客が何を求めているか徹底的に調査することなどを示しました。

講演後には質疑応答があり、シュクラCEOと熱心な参加者との間で活発な議論が行われました。終了後にも多くの参加者が会場に残り、講演者や参加者間で交流する姿が見られ、充実した講演会となりました。

## 平成24年度名古屋大学入学試験を実施

平成24年度名古屋大学入学試験（前期日程）が、2月25日（土）、26日（日）の2日間、東山地区及び大幸地区の試験場で実施され、合計1,708名の募集人員に対し5,342名の出願がありました。

試験当日は、前日の夜に降り出した雨も朝方には上がって、朝早くから豊田講堂前庭や図書館前のグリーンベルト



試験会場の様子

周辺に受験者が集まり、出身校の教師から注意事項や激励を受け、本番に備えていました。また、受験票を手に試験会場を確認している受験者に対し、試験会場への行き方を説明している職員の姿があちらこちらで見られました。

1日目は、午前10時から外国語の試験が全学部において一斉に始まり、5,026名の受験者が試験問題に取り組みました。外国語の時間には、濱口総長、高橋事務局長が各試験場を訪れ試験場主任や試験場本部の教職員を激励しました。午後には理科、地理歴史、小論文の試験が行われました。

2日目には午前10時から数学の試験が、午後には国語の試験が行われ、午後3時55分に全ての試験が終了しました。試験を終えた受験者は、互いに試験問題について話し合うなどして家路につきました。

なお、同試験の合格発表が、3月8日（木）午前11時から豊田講堂において行われました。

また、後期日程試験は、3月12日（月）に医学部鶴舞キャンパスにおいて実施され、合格発表は22日（木）午前10時に、同じく鶴舞キャンパスにおいて行われます。

## 第35回経営協議会を開催

第35回経営協議会が、2月2日（木）、鶴舞地区にある鶴友会館において開催されました。

会議では、濱口総長からのあいさつの後、平成24年度予算、国家公務員の給与削減への対応、大学院創薬科学研究科の設置に伴う教育研究評議会の評議員数について、総長、担当理事からそれぞれ説明が行われ、審議の結果了承されま



経営協議会の様子

した。

次いで、新執行部体制、中期目標・中期計画及び平成23年度計画の変更、平成23年度運営費交付金（業務達成基準適用分）執行状況、平成22年度会計検査院決算検査報告、大学院創薬科学研究科の設置、博士課程教育リーディングプログラム、大学の世界展開力強化事業、若手研究者育成・テニユアトラック（YLC-t）プログラム、リサーチ・アドミニストレーションシステムの整備、平成24年度国際プログラム群学部学生入学試験早期募集の結果、平成23年度就職内定状況について報告が行われました。

外部委員の方々からは、国立大学に関する予算の状況、運営体制、教育研究の活性化、給与削減による影響等に関して貴重な意見が寄せられました。

なお、同日には第12回総長選考会議も開催され、国立大学法人名古屋大学総長に関する中間評価実施要項、中間評価についての検討課題、中間評価実施に係るスケジュール等について審議が行われました。

## 第77回防災アカデミーを開催

第77回防災アカデミーが、2月7日(火)、環境総合館レクチャーホールにおいて開催されました。

今回は、松田曜子特定非営利活動法人レスキューストックヤード事務局長により、「災害ボランティアという存在、役割、可能性」と題した講演が行われました。

講演では、松田事務局長が東日本大震災直後から携わっ



講演する松田事務局長（左）と奥野主査（右）

てきた足湯ボランティア養成派遣事業に関し、足湯を通して作られる被災者とボランティアの人間関係の大切さや、足湯を受けた人の生の声を集めて9,000枚近い「つぶやきカード」が作られたことなどが紹介されました。一例として、高齢者が野菜を食べたいとつぶやいたことから、新燃岳噴火の被災農家より提供された野菜を調理して避難所に配る「たべんさいプロジェクト」が立ち上がったことを紹介し、各被災地で必要とされることに対し、自由に発想して支援することが重要であると強調しました。一般市民など110名が参加し、盛況のうちに終了しました。

また、1月13日(金)には、第76回防災アカデミーが開催され、奥野真行三重県防災危機管理部地震対策室主査による「『地域発!』地域素材からわがまちの『地震像・津波像』を考える」と題した講演が行われました。講演では、地域にある史跡や史料を通して過去の地震・津波被害を明らかにし、未来に語り継ぐことについて、豊富な実例をもとに紹介されました。さらに伊勢神宮の史料を独自に分析し、南海地震だと考えられていた1361年の康安地震が、実際は東南海地震との連動だった可能性があることと突き止めたこと等について説明がありました。96名が参加し、講演後は活発な意見交換が行われました。

## 法をめぐる「なぜ」

大学院法学研究科准教授  
松中学

いた中、それを嫌がる経済団体が、ライバルによって委任状勧誘や敵対的買収に株主名簿が使われないようにすべくロビイングを行ない、それが反映されたのです。

このように、法ルールができた歴史や経緯に着目した「なぜできたのか？」という視点もあります。しかし、ここで終わるわけではありません。法案を議決するのは国会で、条文を起草するのは（閣法では）官庁であって、経済団体ではありません。そうすると、「なぜ」経済団体の意向が反映されたのか？を考える必要があります。実際、会社法の改正では経済団体の意向が通ることも通らないこともあり、どのような条件が整うと、誰の利害が反映されるのかを分析する必要があります。実際、現在行われている法制審議会会社法部会では125条3項には否定的な見解が強く、競争者による閲覧請求を拒絶事由から外す旨の中間試案が出されています。

これは他の法分野や政策でも同様です。世の中で話題になる法改正について「〇〇の利益のため」といわれることがありますが、「なぜ」なのかはそう単純ではありません。しかし、「××が法改正を支配している」という半ば陰謀論のような議論が、他分野の専門家としては優秀な人の口から出てくることも珍しくありません。これでは、法ルールの形成メカニズムの説明としても間違っていますし、問題を修正する方法も歪んでしまいます。

以上のとおり、法ルールの形成がどのように行なわれるのかのメカニズムを問うという意味での「なぜ？」も存在し、実は重要なものです。そして、このような観点からの分析が私の研究の柱の一つです。

ある法ルールが「なぜ」存在するのか、なぜ特定の条文があるのかというのは、とても単純な問いにみえますが、実は色々な次元があるものです。その一つとして、法ルールの中身だけでなく、その形成過程に注目したものがあります。このことを私の専門である会社法の中から、株主名簿の閲覧請求を例にとって説明し、もって私の研究の一端も紹介します。

株式会社は株式を発行し、株主は取締役の選任などに関する議決権や配当を受けるなどの権利を（通常は）有しています。そして、会社はこれらの権利を行使できる者を把握するために株主名簿を作成します。株主や債権者は株主名簿の閲覧・謄写を請求できますが、会社は一定の場合に請求を拒否できます（拒絶事由）。

拒絶事由の一つとして、株主名簿の内容を名簿屋などに売る目的で閲覧・謄写請求を行なう場合があります。株主名簿には株主の氏名や住所が記録されているので、プライバシー侵害を防止するためです。このように、何らかの社会的に望ましい状態を達成するという法ルールの機能、目的に着目した「なぜ」と回答があります。

次に、素直な機能的な説明では足りない場合もあります。他の拒絶事由としては、会社の競争相手による請求が定められています。これもプライバシー保護という説明が提示されていますが、請求者が競争相手であればプライバシー侵害をする可能性が高いというのは無理があるでしょう。それでは、なぜ競争相手をターゲットにした拒絶事由があるのでしょうか？これは、会社法125条3項の制定の過程に注目するとみえてきます。非常に単純化した説明をすると、ライブドアによるニッポン放送買収などの敵対的買収が注目されて

# セマフォリンによる細胞の形の制御機構解明

## —「虫のしっぽ」と神経軸索ガイダンス—

高木 新 大学院理学研究科准教授

神経細胞は軸索と呼ばれる長い線維を介して他の神経細胞に情報を伝え、動物の行動・運動を制御します。胎児の中で脳が作られる過程では、神経細胞から伸び出した未熟な軸索の先端にある成長円錐と呼ばれる構造が、あたかもアメーバのように動きまわり、これに引っぱられる形で軸索が伸びて行きます。私達の脳に存在する神経細胞は数百億個といわれますが、「脳の形成過程でこのように膨大な数の神経細胞が、離れた位置にある各自の適切な連絡相手までどのようにして正しく軸索をのばすことができるのか?」という問題は昔から生物学者の興味を引きつけてきました。

成長円錐を誘導して軸索の行き先を決める物質—ガイダンス因子—の探求は1990年代に実を結び、伸長中の軸索を引きつける因子（誘引因子）と遠ざける因子（反発因子）の存在が明らかになりました。私が研究しているセマフォリンというタンパク質は代表的な反発因子です。（因みに「セマフォリン」の語源は手旗信号を意味するsemaphore（英語）。）セマフォリンは成長円錐に働きかけ、その中に存在する細胞骨格—文字通り「骨組み」として細胞の形を支えるタンパク質構

造—を壊して軸索の伸長を妨げます（図1）。このように軸索ガイダンス研究で発見されたセマフォリンですが、今では神経細胞だけでなく様々な種類の細胞の形の変化を引き起こす作用を持つことが分かっています。

私たちのグループはC. elegans とよばれる線虫（回虫やギョウ虫の仲間）を材料に、「セマフォリンが細胞表面にあるプレキシンという受容体に働きかけた後、細胞内ではどのような信号が次々に伝達されて細胞の形が変化するのか?」について調べています。C. elegans は人間と同様に神経細胞・筋肉・腸・表皮などを有する一方で、「世代交代時間が3日間」とか、「餌が無くても数ヶ月生存」、「生きたまま液体窒素中で凍結保存可能」といった特徴を備え、実験動物として広く利用されています。

セマフォリン遺伝子を破壊したC. elegans 変異体では表皮細胞の形がおかしくなり、その結果、尾の形が異常になることを、私たちは見つけました（図2）。この「虫のしっぽ」の異常を手がかりに、遺伝学的な実験を進めた結果、細胞骨格の作り替えを調節するタンパク質の「翻訳」を介して、セマフォリンが表皮細胞の形を制御することがわかってきました [1]。（生物学ではDNA上の遺伝情報を写し取ったmRNA（伝令RNA）に基づいてタンパク質が合成される過程を「翻訳」といいます。）生命活動の基本の一つである「翻訳」が細胞の形の細かな制御にまで直接関係することを知り、私達も大変驚きました。脊椎動物でもセマフォリンをはじめとする複数のガイダンス因子が翻訳制御を介しての軸索成長円錐に影響を及ぼすことが報告されています。ある面で「虫のしっぽ」は軸索ガイダンス機構を調べる良いモデルに

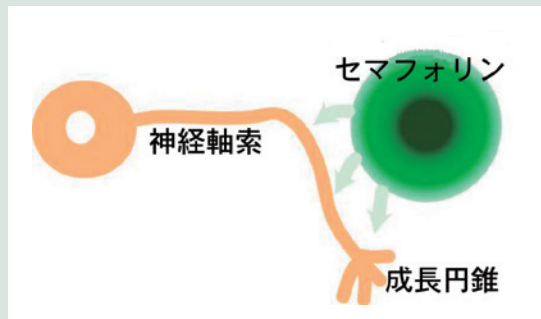


図1 反発性ガイダンス因子セマフォリンによる軸索伸長制御の模式図



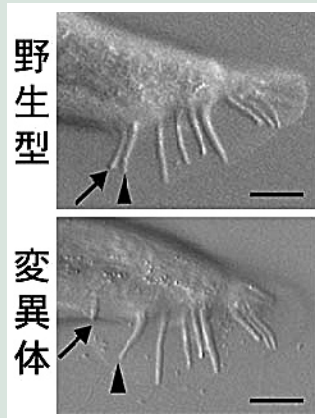


図2 C. elegans 雄の尾部。野生型とセマフォリン受容体変異体の比較。  
変異体では Ray 1 と呼ばれる感覚器（矢印）の生ずる位置が異常となる。Bar=10・m

なるようです。

ところで、今、神経系の研究では、細胞膜の取り込みやミトコンドリアの分布への影響といったセマフォリンの新たな作用が報告され、注目されています。おそらく細胞の形の変化には、細胞骨格だけでなく細胞膜・細胞内小器官などを含む細胞の幅広い変化を伴う必要があるのでしょうか。最近、私たちは、細胞内でセマフォリンのシグナルが伝わる過程において、TOR というタンパク質の複合体形成が変化することを、見出しました(図3)[2]。TOR は翻訳制御を始めとする多様な機能を司ることから「細胞成長の司令塔」とも称される酵素です。セマフォリンが細胞内で多岐にわたる変化を引き起こす秘密を解く鍵を TOR が握っているのではないかと、私は考えています。このことを確かめるために、また、このような基礎的な研究が、将来、セマフォリンが関係する神

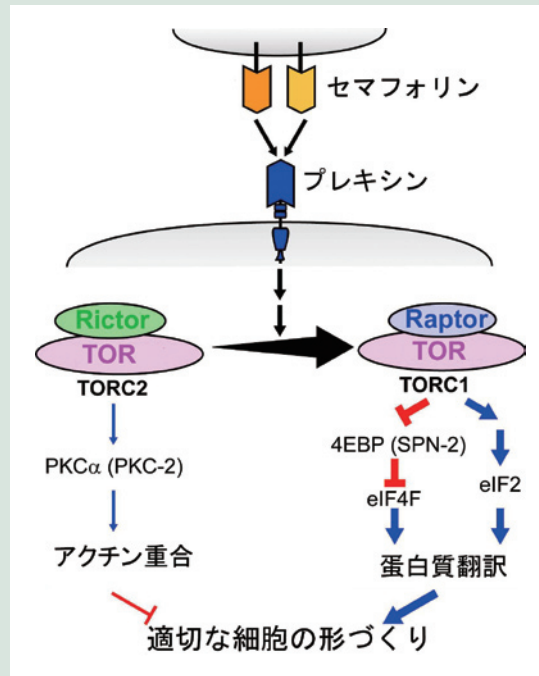


図3 セマフォリンによる細胞形態変化制御のメカニズム  
セマフォリンは TOR1 と TOR2 という 2 種類の TOR 複合体形成制御を介して、翻訳活性化や細胞骨格であるアクチンの重合を調節する。

経再生やガン転移などの医療面での研究の進展にも少しでも役立つことを念じつつ、「虫のしっぽ」を見つめる毎日が続きます。

[1] A. Nukazuka *et al.*, *Genes & Development*. **22**, 1025-1036 (2008)  
[2] A. Nukazuka *et al.*, *Nature Communications* **2** 484 DOI: 10.1038/ncomms 1495 (2011)

1980年 京都大学理学部卒  
1984年 京都大学大学院理学研究科博士課程中退  
1984年 京都府立医科大学医学部解剖学教室 助手  
1990年 名古屋大学理学部生物学科助手  
1992~1994年 カナダ McGill 大学訪問研究員 (Siegfried Hekimi 研究室)、  
1995年~ 名古屋大学大学院理学研究科助教授  
2007年より現職  
趣味：低山徘徊。  
最近思うこと： 研究は自然との対話。

たかぎ しん



## 第2回 CAMPUS Asia 法学院長・学部長会議を開催

●大学院法学研究科



パネルディスカッションの様子

大学院法学研究科は、2月5日(日)、名古屋市内のホテルにおいて、第2回 CAMPUS Asia 法学院長・学部長会議を開催しました。

同会議は、法学・政治学分野におけるキャンパス・アジア構想の具体化について話し合うために開催したもので、中国人民大学法学院、上海交通大学法学院、成均館大学校法学専門大学院社会科学部、ソウル大学校法科大学の院長・学部長が参加し、東アジアの地域のかつ学際的な人材の育成などについて報告を行いました。

同研究科では、昨年11月に「東アジア『ユス・コムーネ』(共通法)形成にむけた法的・政治的認識共同体の人材育成」がキャンパス・アジア日中韓のトライアングル交流事業として採択され、現在中国、韓国の主管大学とともに、単位相互認定に基づく学部学生の交流と質の保証された教育研究交流を行っていくためのプラットフォームづくりを進めています。

## 平成23年度「法整備支援の研究」全体会議を開催

●大学院法学研究科、法政国際教育協力研究センター



記念撮影

大学院法学研究科及び法政国際教育協力研究センターは、2月11日(土)、12日(日)の両日、文系総合館において、平成23年度「法整備支援の研究」全体会議を開催しました。

「法整備支援のためのインタラクティブな比較法研究」をテーマとした今回は、法務省、日本弁護士連合会、日本司法書士会連合会、国際協力機構等からの来賓を含め、法整備支援に携わる研究者や実務家ら約70名が参加しました。

第1部では、初めにオーストラリアのランドール・ピーレンブーンラトロープ大学教授が基調講演を行い、その後パートナー間の対話として、中国、ベトナム、ウズベキスタン、モンゴル、カンボジア、インドネシアからの参加者により、各地域における法の支配と法整備支援について報告がありました。第2部では、キャンパス・アジアの構想と今後の展望について、中国人民大学、韓国の成均館大学校、本学の担当教員から、各国を代表した報告とパネル・ディスカッションがありました。

## 講演会「ウズベキスタンを取り巻く経済・国際情勢」を開催

●法政国際教育協力研究センター



講演する鳥会長

法政国際教育協力研究センターは、2月5日(日)、一宮市内において、NPO法人日本ウズベキスタン協会、一宮市との共催で、講演会「ウズベキスタンを取り巻く経済・国際情勢」を開催しました。

一宮市は、愛知万博フレンドシップ事業として旧木曾川町がウズベキスタン进行交流相手国としてから、本学に在籍する同国出身の留学生と積極的に交流を進めています。講演会は一宮市民と本学学生を対象に開催され、テレビやラジオでジャーナリストとして活躍する鳥信彦同協会会長が、ウズベキスタンと日本の関わりや世界情勢について話しました。また講演会前には、鳥会長を囲んで同国留学生によりウズベク料理が振る舞われ、続いてウズベク民族舞踊も披露され、賑やかな会となりました。

なお、今年は、日本とウズベキスタンの国交樹立20周年の年であり、同講演会は外務省の「中央アジア国交20周年」行事の一環として開催されました。

## 第14回名古屋ビジネスセミナーを開催

●大学院経済学研究科

大学院経済学研究科附属国際経済政策研究センターは、2月15日(水)、日本経済新聞社名古屋支社会議室において、経済学部同窓会である社団法人キタン会との共催により、第14回名古屋ビジネスセミナーを開催しました。

同セミナーは、産学官連携活動の成果を地域社会へ還元すべく、同センターの政策情報研究室を中心に企画・運営



セミナーの様子

されているもので、今回は杉田伸樹同センター教授の司会のもと、まず多和田経済学研究科長が開会のあいさつを行い、前財務省東海財務局長である池田篤彦同省近畿財務局長より「最近の財政・金融情勢について」と題して講演がありました。

池田局長は、最近の大きな話題である「社会保障と税の一体改革」を主要な論点として取り上げ、その基本的な考え方だけでなく、雇用環境の変化や実質成長率の停滞など背景にある経済状況も含め、詳細な資料に基づいて解説しました。さらに、財政健全化に関しては、諸外国のデータも示しつつ国際比較の視点から日本の現状を論じました。それにより、政府債務の累積がはらむ問題点や人口構成の変化と社会保障費増大の関連、国民負担率や消費税率の実情などが、外国との比較の中で浮き彫りにされました。

参加者は70名近くへのぼり、講演後は年金の問題を中心に具体的な質問がたくさん寄せられました。池田局長は、年金受給を個人的視点から捉えた場合の損得感と、年金制度全体からみた場合の負担・給付のバランスとの違いを丁寧に説明しました。活発な質疑応答を経て、最後に、金井同センター長が開会のあいさつを行いました。

## 東海がんプロフェッショナル養成プラン平成23年度市民公開講座を開催

●大学院医学系研究科

大学院医学系研究科は、2月5日(日)、医学部附属病院において、東海がんプロフェッショナル養成プラン平成23年度市民公開講座を開催しました。

同プランは、臓器横断的がん診療を担う人材育成プログラムで、文部科学省の大学改革推進等補助金による補助を受け、東海地域の8大学及びその他機関と連携して、平成



講座の様子

19年から5年間実施しています。「ここまで進んだがん治療」をテーマとした今回は、愛知県を中心に約250名の一般の方々参加了。

まず、祖父江医学系研究科長が開会のあいさつを行い、同プランの活動について紹介しました。続いて、満間綾子同研究科特任助教から、「名古屋大学のプロフェッショナル」と題してがん医療におけるプロフェッショナル(専門家)の重要性について、深谷陽子医学部附属病院看護師から、「緩和ケアチームの役割」と題して緩和ケアの考え方と同院における緩和ケアチームの現在の活動について、下方智也同研究科特任助教から、「最新のがん薬物療法」と題してがん種ごとの最新の薬物療法や治療について講演がありました。最後に安藤医学部附属病院化学療法部長が開会のあいさつを行い、終了しました。

参加者は大変熱心に聴講し、講演後の質疑応答では数多くの質問がありました。また、終了後のアンケートでも、「分かりやすい内容だった」、「有意義だった」といった意見が多数寄せられ、同プランの最終年度にふさわしい内容となりました。

## 看護臨床実習交流プログラムを実施

●医学部

医学部保健学科は、2月5日(日)から12日(日)までの間、医学部附属病院などにおいて、看護臨床実習交流プログラムを実施しました。同プログラムは独立行政法人日本学生支援機構の平成23年度留学生交流支援制度に採択されており、海外の大学と提携して看護学専攻学生の受け入れ・派遣を行い、医療現場における実習を中心とした短期



附属病院外科病棟における研修の様子

滞在を実施しています。

今回受け入れた韓国の延世大学校ウォンジュ医科大学看護学科と中国の上海交通大学看護学部の学生計6名は、同院で内科、外科、小児科の各病棟に分かれ、実習中の本学学生とともに患者ケアや手術の見学を行ったり、他職種の話を聞いたりしました。韓国と日本では看護師の役割や患者と家族間の関係が異なることを経験するなど、自国の看護を新たな視点で捉えるきっかけとなったようです。

また、大幸キャンパス近くの老人保健施設「ジョイフル砂田橋」を見学して、日本の高齢者福祉について学び、同キャンパスにあるがん患者のための緩和ケアサロンでは、日本のがん患者がとても明るいことに驚いていました。その他の時間には、本学学生ボランティアによる案内で日本文化を経験し、最終日には、フェアウェルパーティーを行い、今後の3大学間交流のますますの発展を誓いました。

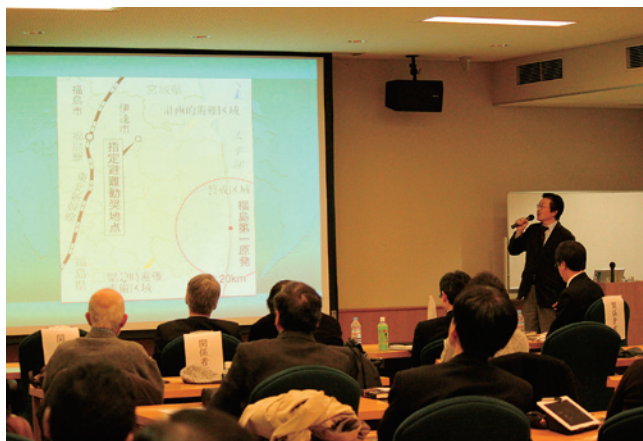
なお昨年11月には、看護学専攻の学部3年生4名が延世大学校に1週間滞在し、原州キリスト病院での研修を中心に、韓国の医療事情や看護内容について学びました。

来年度には、今年度と同様のプログラムに加え、上海交通大学への派遣も予定しています。

## シンポジウム「福島原発事故をめぐるコミュニケーション」を開催

●大学院国際言語文化研究科

大学院国際言語文化研究科メディアプロフェSSIONALコースは、2月3日(金)、文系総合館カンファレンスホールにおいて、シンポジウム「福島原発事故をめぐるコミュニケーション」を開催しました。これは、今年度の同研究科プロジェクト「メディアと外交」の一環として、内閣官房などの協力を得て開催したものです。



シンポジウムの様子

初めに、プロジェクトの研究代表を務める中村登志哉同研究科教授が、原発事故に関して行われた国際コミュニケーションを政府とメディア双方の立場から検証することが、今後の日本の外交を考える上で重要だと問題提起を行い、これを受け、日本政府の国際広報責任者として国際メディアの対応に当たってきた四方敬之内閣副広報官が、当初の日本人への共感と称賛が、次第に日本政府と東京電力の対応能力に対する批判的論調へ変化したと報告しました。

また共同通信社の会田弘継編集委員室長は、米政府を情報源として深刻さを強調する英文報道と、事故を過小評価しがちな日本政府発の情報の溝の大きさが悩みだと語りました。加古陽治東京新聞記者も、パニックへの過度の恐れから情報を公開する姿勢に欠けたのではないかと指摘し、事故以来福島にとどまっている早川俊哉河北新報福島総局長は、放射性物質の飛散予測システムのデータがより速く公表されていれば被曝せずに済んだ住民も少なくないはずだと、事故現場の地元紙としての思いを語りました。

討議の様子は、新聞、テレビで報道されたほか、NHK国際放送(英語)のニュース番組に取り上げられ、国外に向けても放送されました。

## 「環境と映像広告」シンポジウムを開催

●大学院国際言語文化研究科、グローバル COE プログラム「地球学から基礎・臨床環境学への展開」

大学院国際言語文化研究科メディアプロフェッショナルコース及びグローバル COE プログラム「地球学から基礎・臨床環境学への展開」は、2月10日(金)、野依記念学術交流館において、「環境と映像広告」シンポジウムを開催しました。

日本海洋学会青い海助成事業の支援を受け、環境学分野



参加者と意見を交わすマエキタ代表（左）と江川副委員長（右）

と映像メディア分野の共同で行われた同シンポジウムでは、特定の環境や課題を身近に感じてもらうための環境コミュニケーションの中から、特に映像広告に焦点を当て、その変化と発展及び課題と展望について考えました。

当日は、広告の仕組みを社会貢献に生かすため40年前に設立された AC ジャパン（旧公共広告機構）の江川建男名古屋運営委員会副委員長が、歴代の環境に関する映像広告とその社会背景の考察を行い、様々なメディアを駆使して社会マーケティングに取り組むマエキタミヤコ サステナ代表が、「市民語」の使い方を含めた環境メッセージ伝達におけるコツと映像発信の可能性について講演しました。

また本学からは、山下博美環境学研究科特任准教授が環境コミュニケーションのアプローチについて紹介し、池側隆之国際言語文化研究科准教授と同研究科の大学院生が、昨年度より行われている干潟の環境広告制作について話し、制作広告を上映しました。

メディア、企業、環境保全団体、行政、大学関係者、一般市民など多様な分野から約100名が参加し、来場者からは「環境とメディア分野の融合が新鮮で多くを考えさせられた」、「環境広告制作の教育的意義を感じた」等の声が聞かれました。

## 太陽活動と気候変動の関係に関する第2回名古屋ワークショップを開催

●太陽地球環境研究所、地球生命圏研究機構

太陽地球環境研究所及び地球生命圏研究機構は、1月16日(月)、17日(火)の両日、野依記念学術交流館において、太陽活動と気候変動の関係に関する第2回名古屋ワークショップを開催しました。

現代社会にとって重要な課題でもある気候変動の領域には未だ多くの未解決問題が残されています。特に、地球環

境に対する太陽活動の影響は、その重要性が古くから指摘されながら、現象の性質とメカニズムに関して未だに十分な理解が得られていません。同ワークショップは、この歴史的な課題を学際的な立場から議論し、環境変動を多角的に考えることを目的として実施されました。

太陽の気候影響研究のパイオニアであるジュディス・リーン アメリカ海軍研究所研究主幹の基調講演で始まったワークショップでは、太陽と太陽圏の長期変動、宇宙線とその気候影響、成層圏と大気化学、大循環モデル、千年スケール変動と極端気象現象に関する科学セッションが実施され、3件の招待講演、13件の一般講演、25件のポスター発表がありました。日本をはじめ米国、英国、デンマーク、韓国、インドから、太陽物理、太陽地球系科学、気象・気候学、古気候学など様々な分野の研究者130余名が参加し、満席の会場で活発な議論が展開されました。

参加者は、通常の学会では行うことができない様々な異分野交流と議論を通して、太陽活動と気候の関係に関する新たな研究の方向性を探ることができたようでした。



ワークショップの様子

## 文部科学省先端研究施設共用促進事業国際シンポジウムを開催

●エコトピア科学研究所

エコトピア科学研究所超高压電子顕微鏡施設は、1月19日(木)、20日(金)の2日間、野依記念学术交流館において、文部科学省先端研究施設共用促進事業国際シンポジウム「産業界における電子顕微鏡の役割－真の産学共同に向けて－」を開催しました。

同施設は、平成7年度より文部科学省の先端研究施設共用促進事業に参画し、「高性能電子顕微鏡群によるナノ・バイオサイエンス支援事業」を推進してきました。同事業は、超高压電子顕微鏡を中心とする高性能電子顕微鏡群を民間に開放してイノベーション創出に資するとともに、利用料金により先端研究施設の経済的自立を目指すことを目的にしており、開始以来、順調に推移してきています。しかし、事業の推進を通じて、大学の目指す産学協同と産業界の目指す産学協同の間にはギャップが存在することも明らかになってきました。

同シンポジウムでは、欧米を中心とした外国における産学協同事業が日本より先行している状況も踏まえ、海外から産学協同の第一線で活躍している著名な研究者を招へいし、日本の研究者との間で、我が国の産学協同の将来について国際的な観点から意見交換を行うことを目的としました。

初めに濱口総長が歓迎のあいさつを行い、招待講演者として、海外から国際顕微鏡学会連合会長を務めるバリー・カーター コネチカット大学教授(米国)、朱 溢眉ブルックヘブン国立研究所研究員(米国)、フランシス・ロス IBM ワトソン研究所研究員(米国)、エリック・ジョンソン コペンハーゲン大学教授(デンマーク)、カマニオ・チャトパディヤ インド科学大学教授、洪 文憲株式会社 POSCO 博士(韓国)が、国内から河村能人熊本大学大学院自然科学研究科教授、木下圭介トヨタ自動車研究員、上野武夫山梨大学燃料電池ナノ材料研究センター客員教授に加えて、本学より田中信夫エコトピア科学研究所教授、武藤俊介工学研究科教授、佐々木勝寛同研究科准教授、坂 公恭同研究所特任教授が講演を行いました。

講演や討論を通じて、産業界の抱える問題、産学協同が必要とされている理由、産業界から大学への要望はスピードと守秘であり必ずしも装置の最高性能を必要としないこと、また、産学協同の研究を有効かつ的確に遂行できる人材の育成が急務であることについてコンセンサスが得られるなど、有意義なシンポジウムとなりました。

## ICCAE 2011年度第9回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センター(ICCAE)は、1月16日(月)、2011年度第9回オープンセミナーを開催しました。

講演者の関谷信人独立行政法人国際協力機構(JICA)技術協力専門家は、アフリカ・タンザニアでの稲作振興協力プロジェクトに2008年より携わっています。同氏はま



講演する関谷技術協力専門家

ず、JICA がアフリカにおけるコメ生産を10年間で倍増することを目標としたイニシアティブ「アフリカ稲作振興のための共同体(CARD)」に取り組んでいることを紹介し、タンザニアでの同プロジェクトについて説明しました。

同プロジェクトは、1970年代にキリマンジャロ州で始まった稲作振興協力が端を発し、現在ではタンザニア全土の44灌漑地区の灌漑稲作技術を改善する一大プロジェクトに成長しています。灌漑稲作のみならず、栽培面積及び生産量の両面で大きな割合を占める天水稲作も対象にすることが期待されており、これが成功すれば、コメ生産倍増の同国の国家目標に大きく貢献できる可能性があります。アフリカの農業・農村開発を推進するためには様々な取り組みが必要ですが、稲作分野を含む農学分野の研究能力の向上は重要な課題の1つです。

一方で、タンザニアにおける稲作適正栽培技術を開発するための課題についても紹介し、わが国の研究者に、自らの研究課題として関心を持ちプロジェクトに積極的に参加してほしいと呼びかけました。

ICCAEをはじめとして、学内、他大学からも教職員・学生が参加し、活発な議論が行われました。

## 予防早期医療創成センター第2回ワークショップを開催

●予防早期医療創成センター

予防早期医療創成センターは、1月31日(火)、ES総合館ESホールにおいて、予防早期医療創成センター第2回ワークショップを開催しました。

同センターは、予防早期医療に関わる広範で複合的な研究課題に対し、医工等分野を越えた連携や産学官の連携により融合研究に取り組む拠点として平成22年4月に設置



ワークショップの様子

され、現在企業7社と協働研究を進めています。ワークショップ当日は、同センター長で副総長も務める松尾医学部附属病院長の開会のあいさつに続き、産学連携で進行中の研究テーマを中心に、6つの分科会が開催されました。

分科会の内容は、今般、総合特区制度に採択された豊田市での健康医療情報の統合に関する試みや、地域医療ネットワーク、身体運動機能センシング等ICTに関する話題から、抗体を用いた診断マーカー・ツールや物理化学のライフサイエンス応用、アレルギー診断まで、幅広い分野に及びました。学内の医学・工学・農学・情報科学の研究者はもとより、協働企業の技術者、企画担当者、行政関係者など160名の参加があり、予防や医療に関する多面的なテーマに対して、熱心に情報共有や意見交換を行いました。

ポスターセッションでは、来場者の健康状態を企業の試作機でモニタリングするデモンストレーションも実施されました。企業との協働研究は実用化に近いものも多く、研究者の関心を引いていました。

ワークショップの最後には、「全体俯瞰」として各座長によりセッションの報告が行われ、参加者全員で研究の到達点を再確認しました。

## 第3回体験ワークショップ「石器から学ぶ文化と自然」を開催

●博物館

博物館は、2月11日(土)、第3回体験ワークショップ「石器から学ぶ文化と自然」を開催しました。

同ワークショップは地域貢献・社会教育プログラムの一環として開催しており、今年度3回目となる今回は、「顕微鏡で見る石器」をテーマとし、「石器を顕微鏡で見て何が分かるのか」という問いかけからスタートして、その疑



石材の薄片を観察する参加者の様子

問に少しずつ答えながら、体験活動と標本観察を行いました。

初めに、石器の素材として頻繁に用いられる黒曜石やフリントの薄片スライドの観察を行い、それぞれの構造や形成過程について説明し、その情報が石器石材の産地を知る手がかりになることを解説しました。

次に、石器が使われて生じる刃こぼれなどの使用痕の顕微鏡観察を行いました。石器レプリカを用い、動作(切る・削る)や被加工物(革・木・鹿角)といった条件を制御して使用し、その結果生じた使用痕の特徴を観察、記録しました。また縄文時代の石器の使用痕を観察し、実験下の使用痕と比べることによって、石器の機能を推定しました。

最後に、大きさ数ミリの石器を顕微鏡観察し、微細な破片でも石器の形態的特徴が認められることを確かめました。遺跡の発掘で微細な石器片を回収し、石器製作場や石器廃棄場を同定する方法についても説明しました。

複雑な学問的背景も含む体験活動でしたが、応募者の中から選ばれた参加者14名は、普段ガラスケース越しに見るのとは異なる石器の様々な姿を興味深く観察していました。



## 自由闊達な名古屋大学に感謝

佐分 晴夫 理事・副総長

3歳から東山キャンパス近くに移り住んだ私にとって、名古屋大学は庭のようなものであった。小学校の頃は鏡池へ釣りに通ったし、中学校のマラソンコースには名古屋大学キャンパスが含まれていた。そんな私が、1966年に名古屋大学に入学し、途中、金沢大学にお世話になった8年を除くと、実に38年もの間、構成員として名古屋大学に関わってきた。

したがって、「やんちゃ佐分」ができあがったのも、今日まで無事に過ごすことができたのも、「自由闊達」な学風を重んじる名古屋大学のおかげだと心から感謝している。

大学院生の頃、「坂田教室に倣え」をキャッチフレーズにして、公法教室の民主的諸制度の整備とその運用に携わった。この成果がいかに貴重なものであるかは、後に他大学の実情を知り、痛感させられることになる。益川、小林両氏の

ノーベル賞受賞を契機に、坂田氏や坂田教室が注目を集めるのは意義あることであるとともに、自由闊達な学風について名古屋大学が自己点検をする良い機会でもあると思う。

独立法人化後、理事・副総長を6年も務めることになったのは、研究者としての自分の人生にとって大きな誤算であった。管理職を経験して実感したことは、自由を保障された研究者という身分が、いかに恵まれたものであり、また、創造的営為にとって、いかに必要なものであるかということである。「自由闊達な学風よ永遠なれ」



## 定年を迎えて

笠原 久美雄 産学官連携推進本部教授

2005年に企業から先端技術共同研究センター教授に転身後、産学官連携推進本部で知的財産を中心に産学官連携を担当して7年が経過しました。その間、次の課題に取り組みました。

①体制整備：分野別のチーム制を導入し、また、鶴舞地区にサテライトオフィスを設置するなど、きめ細かなサービス向上に努めてきました。更に、中部 TLO と連携を密にして技術移転活動を推進するとともに、従来の特許権の実施許諾に加え、ノウハウ（プログラム著作物を含む）実施許諾と成果有体物提供とを知的財産ライセンスの3本柱とするべく3つの増収ワーキンググループを組織し、その活動を展開してきました。

②インフラ整備：共同研究契約書の雛形を柔軟にする見返りに産学連携活動経費10%を導入するとともに、ノウハウ取扱規程などを制定し外部資金獲得のための環境整備に注力して

きました。また、教員向け知的財産マニュアルを発行して、知的財産活動を円滑に推進できるように努めてきました。

③リスクマネジメント：国際化に必須となるコンプライアンスの重要性を浸透させ教員のリスクを極力軽減させるため、不正競争防止法の営業秘密の保持に関し、産学連携における研究情報管理ポリシーを制定し意識改革に努めてきました。また、外為法に関し、安全保障輸出管理ハンドブックを発行し啓発に努めるとともに、国内大学の先頭を切って安全保障輸出管理体制の整備と運用に注力してきました。

以上の業務を円滑に遂行できたのも、ひとえに教職員の皆様のご理解とご協力、及び宮田理事をはじめとする関係者のご支援の賜物であり、心より感謝申し上げます。最後になりましたが、名古屋大学の益々のご発展をお祈り申し上げます。



## 中国古代史研究に従事して

江村 治樹 大学院文学研究科教授

私は中国古代の歴史、とくに紀元前の歴史の研究という世間から見ると浮世離れたような分野の研究を続け、学生、院生の教育に従事してきました。在任中には大病を患い方々にご迷惑をかけてしまいました。なんとか定年まで勤めることができたのは、よき師や同僚、研究仲間にも恵まれたことによると思います。学部入学以来、いくつかの大学を転々としたが、神戸大学では甲骨文字研究の大家、名古屋大学大学院では日本における中国中世史研究を理論的にリードした大家、そして京都大学人文科学研究所助手の時には世界的に知られた中国考古学の大家に直接教えを乞うことができました。大学を渡り歩くことの意義を自ら肌で感じました。

名古屋大学に赴任してからは、現在では考えられないことですが、若手の教官の研究環境に配慮されていて研究に相当

程度集中することができました。大学において高度な教育を行うにはレベルの高い研究が維持できる環境を整えることが必要だと今でも考えています。在任中には中国出土文字資料や中国古代都市社会の研究を続けました。このような研究には考古学の素養が欠かせませんが、日本史でも西洋史でも古代史研究では今では当たり前になってきました。定年退職後もまだ科研費が使用できますので、しばらくは中国における都市遺跡調査を続けるつもりです。





## 「新自由主義」は教育・研究にも

春日 豊 大学院文学研究科教授

本学に24年間に在籍し、今年度で定年退職することになりました。無事退職できるのも、本学の皆さまのおかげです。有り難う御座いました。

この間、大学をとりまく環境は、厳しさが増していると感じています。その転機となったのが、「独立行政法人」化と大学院重点化だったと考えています。公式説明とは逆に実質的に規制が強まり、教育・研究評価の画一化が進行し、多様な価値観が弱まるのではないかと危惧しています。教員を削減し、出口を考慮せずに進められた重点化は、大学院生の質の低下とオーバードクターの急増をもたらしています。これらの基調に流れている考え方は、米国模倣の「新自由主義」であり、競争・点数化・効率化による研究と教育の評価であり、一方の優遇とその対極には予算等の削減・廃止・切

り捨てという教育・研究の格差の拡大があります。こうしたあり方が、日本全体の大学の教育・研究体制の向上となるのでしょうか。大きな疑問を持たざるを得ません。

こうした状況のなかで、「大学の自治」とは何か、を考えることが多くなりました。私にとって名古屋大学のイメージは、他大学の大学生であった時以来、民主的な大学、自由な大学でした。多様な考え方が併存し、自由に発言できるコミュニティです。本学に着任しても、それが裏切られることはありませんでした。厳しい大学環境ではありますが、この創造された伝統を堅持し、いっそうの発展を願って止みません。



## 多くの出会いに恵まれて

高橋 亨 大学院文学研究科教授

名古屋大学の教養部に文学の講師として着任してから、37年もの年月が過ぎてしまいました。教養部を改組して人間情報学研究科を立ち上げることに関わり、その社会情報学専攻で情報化学などを構想しました。やがて文学部と文学研究科に移籍して現在に至っています。その間、他大学から引く手あまたの時期もありましたが、とにかく名古屋大学に居座り続けたのは、名古屋という土地とこの大学が好きだったからでしょう。

その間に、研究者や学生さんはもちろん、じつに様々の多くの人々との出会いがありました。別れも多くあったことになりましたが、それは記憶の中の出会いとして持続しているので、やはり出会いに含まれるのです。こんな考え方をするのは、私が『源氏物語』のような古典文学を研究してきたこと

と関わっているのでしょう。書物の中の人々や、それらの書物を書き記したり読み続けてきた人々も含めて、豊かで幸福な出会いを積み重ねてきたのです。

そうした出会いの記憶を大切に、皆様に感謝しつつ、新たな始まりを予感しています。今後ともどうぞよろしく。



## 風は吹きますか

速水 敏彦 大学院教育発達科学研究科教授

若い頃、母校で教鞭がとれることになろうとは全く予想できなかったが、大阪教育大学で12年間過ごした後、昭和62年から25年間も名古屋大学で過ごさせていただいた。その間、私の周りにはいい風が吹いていたようだ。失敗や葛藤はいくつもあったけれど、総じて多くの優秀で思慮ある人々に囲まれ、大病をすることもなく、自由に研究や教育に打ち込み夢を追うことができた。研究や教育以外の大学内外での重要な仕事にも参加させていただく機会も得、見聞を広めることもできた。

人間形成の法則を問題にしてきた教育心理学者である自分がいうのはおかしいが、今思うのは、人は偶然や運に大いに左右されて生きているということだ。私自身、恩師たちや同僚、友人などの出会いや助言がなかったら、また家族が健康

でなかったら随分違った人生であったようにも思う。

社会には思いがけない自然災害のような嵐だけでなく、政治的・経済的な強風が吹き荒れることもある。大学も今、厳しい風に晒され始めている。しかし、若い人々には目標達成の困難さを時代のせいにするのではなく、強い風にしっかり対峙し、いい風が吹く日を信じて努力してほしい。研究のセレンディピティも風雨の中でも武骨に不断の努力を重ねることと微笑んでくれるのではなかろうか。

名古屋大学でお世話になったすべての方々にも深く感謝申し上げる。去る日が近づくにつれてなんとも感傷的だが当たり前のようにみえていたキャンパスの木々も愛おしい。

爽やかないい風が大学に吹いてくれることを念じつつ。



## 定年を迎えて

佐藤 倫正 大学院経済学研究科教授

一橋大学に助手として2年、岡山大学に20年、そして2000年（平成12年）に名古屋大学に着任して12年を経て定年を迎えることになりました。

何か一言ということだと思いついた言葉が「牛にひかれてイスタンブール」でした。「春風や牛にひかれて善光寺」という俳句のパロディーですが、思いがけないことが縁で偶然よい方向に導かれる、という意味のようです。

アジア会計学会（AAAA）の設立にかかわって、名古屋大学で2002年に第3回大会を主催しました。このことが縁となって、海外の多くの研究者と意見交換ができるようになり、資金会計に関する情報発信も可能となりました。また、ドバイやバリなど、AAAAを開催するアジアの国々の都市を巡ることもありました。それによって、神道、仏教、イ

スラム教、ヒンドゥー教などの様々な文化を肌で感じる事ができました。なかでもイスタンブールは思い出のひとつで、学会の後、アナトリア高原にまで足をのばして、ヒッタイト帝国の都と神殿の跡を見ることができました。

資金会計と呼ばれる新しい領域の確立をめざして研究を進めてきましたが、この12年間はとても有意義で充実したものでした。多くの方々からご指導とご高配をいただき厚くお礼申し上げます。



## 程よいいい加減さ

尾張部 克志 大学院理学研究科教授

小生が名古屋大学にお世話になったのは、教員としてだけでもほぼ34年間になります。理学部に14年弱、次に情報文化学部にて約11年、そしてまた理学部に引き取られて9年になり、定年を迎えることになりました。その間、ずっと大学の変化を見て来たことになりました。

昔と比べると老人の常ですが、目で感じる変化を一つ挙げると、大学の建物や設備が格段に立派になったことです。卒論発表一つにしても、以前は大きめの教室でやっていたのですが、最近の発表会場は学会のメインシンポジウム会場以上の立派さです。一方、心で感じる変化を一つ挙げると、総じていい加減さが許されなくなり、何事もきちんとしなければいけないような風潮になってきたことです。これ自体は良いことのように聞こえますが、結局は研究も含めて何事にも

すぐに結果が求められるようになり、直接役に立ちそうなものや出口のわかるもの、説明のしやすいものに流れているように感じます。これではどのような結果になるのかわからないものや何年もかかるようなテーマに取り組むのは難しいでしょう。本学学術憲章にも謳われている「自由闊達な学風」の中には「程よいいい加減さ」も含まれているように思うのですが。



## 定年退職にあたって

鈴木 順三 大学院理学研究科教授

名古屋大学に入学して物理を志し、いくつかの他大学での研究生生活を経験した後、教員として再び名古屋大学にお世話になり21年が経ちました。ついこの間まではまだまだ先のことであると思っていたのに、定年をむかえる時がやってきました。これまで無我夢中で務めてきましたが、何とか研究と教育を続けられたのは、今までに関わってきた周りの多くの人の蔭であると感謝しています。

私は、自然科学の中で物性物理の理論、特に有機物質が電気を通すことに関する基礎的なことを研究してきました。大学院時代に当時話題となっていたこの分野の研究を始め、その後は自分なりにその分野を広げつつもりではありましたが、今も当時の先生に教わった延長線上にあります。やはり若いときに受けた経験はいつまでも大きな影響を与えるもので

す。低次元導体における電子の集団運動、擬一次元物質の絶縁状態での電子の鎖内閉じ込め、有機超伝導体の研究の中で偶然に発見したディラック電子等、地道な努力の中で意外な結果に一喜一憂し、様々なことを学びました。物質の現象と向き合う研究を通して、自然は人の知恵でははかり知れない舞台を提供してくれることに感動しました。研究をやればやるほど疑問が出てきて、自然科学への興味は尽きません。私の研究はその中でほんのささやかなものではありましたが多少とも関与できたことを幸せに思っています。これからの研究の発展を期待します。



## 退職に際して

富松 彰 大学院理学研究科教授

昭和61年に名大物理学教室に着任しました当時は、理学部B館という古い建物内に研究室があり、他大学から入学して来た大学院生からその老朽さに対して不評を買っていたこともありましたが、耐震改築などによるその後の建築上の改善はめざましいものがありますが、同時に、大学院重点化に伴う素粒子宇宙物理学専攻と物質理学専攻への大学院の分離やCOEプログラムの展開などを経て、物理学科における研究体制も大きく変遷・拡大していくことになりました。この研究上の拡大自体は喜ばしいことですが、学科としての研究遂行の一体感が失われつつあるという点は気になるところで

す。私は、一般相対論を基礎として、強重力の世界における現象の理論的研究に従事してきました。京大や広大で研究を始

めました頃はややマニアックな分野でしたので、名大で重力理論の新研究室を開くことができましたことには深く感謝しています。最近では、インフレーション宇宙やブラックホールというようなトピックスへの注目もあり、一般相対論関連研究も物理学会や天文学会で幅広く市民権を得るようになりました。また、一般相対論の重要性を認識させた研究の発展は、観測による検証の可能性にも促されて、21世紀の新重力理論の構築に向けての手掛りになっています。新鮮な発想を持つ名大の若手研究者諸君がそのような基礎理論の開拓の一翼を担うことを期待しています。



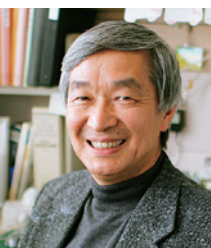
## 名古屋大学という場

前田 雄一郎 大学院理学研究科教授

私は名古屋大学理学部で博士号を取得した後、生物物理学分野の研究者としてドイツの研究所で13年半、民間企業（松下電器産業＝当時）で6年間、理化学研究所で8年間、名古屋大学で8年間といろいろな組織と文化を経験しました。経験を通じて私なりに確信したことがあります。第一に自然科学の研究のためにも、社会科学、人文科学の分野の研究者と直接交流できる総合大学という場が極めて重要であること。第二に個性的で独創的な研究者が同じキャンパスにすることがだいじであるということです。私は名古屋大学がそのように優れた場を与えてくれたことに感謝していますし、もっと優れた場になって欲しいと希望しています。

大学に来て痛感したことは講義をすることがどんなに重要かつたいへんな作業かということです。研究者は自分の専門

の分野に関することでも知識に穴を残したままになっているものです。これでも研究活動はできるが、しかし穴を埋めることができればもっと優れた着想を得ることができるということです。講義をすることは第一に我々の知識に体系を与えることであり、第二に知識の穴を埋めることであると悟りました。まったく教育の経験がなかった私の不十分な講義を受けた多くの学生諸君には誠に申し訳ない思いです。講義の第三の意義は、学生諸君に科学のおもしろさと研究への情熱を伝えることです。内容は不備だったけれど、情熱は伝わったと言ってもらえれば望外の幸せです。



## 感謝

町田 泰則 大学院理学研究科教授

私は、岡崎令治・恒子先生の下で大学院を終え、その後26年間名古屋大学理学部で仕事をさせて頂きました。子供の頃の夢であった科学者としての研究の場を理学部に与えられたことに感謝しています。素晴らしい所でした。研究成果の評価には時間がかかることも多いので、それについては棚上げにしたいと思います。

大学では、教育が主務です。学部生には、多くの場合授業で接します。私は、時々「大学では、研究者が直接若い人を教える。だから、同じ教科書を使っても、名大と他では、内容が違って来るし、その点に意味がある」と話してきました。しかし、これは残念ながらあまり成功しなかったような気がします。

大学院生は初めのうちは研究者としては未熟でしたが、や

がて彼らは研究の場での戦友になりました。研究室からでた若手がどれだけの研究をするのかにより、共に過ごした時代の成果が問われるでしょう。このように、大学院生に対する教育の評価にも時間がかかりますので、これも棚に上げることにします。

上記した内容と比べるとレベルが違いすぎますが、研究の継承性という意味では、ケンブリッジ大学のルーカス教授職を思い出します。これは、1664年に創設され、第2代目がA. ニュートン、ずっと下って量子力学のP. ディラック、そして2代前はS. ホーキングが教授でした。約350年に渡って一つの教授職が続いています。大学では教授職を継承することにも意味があるような気がしています。



## 定年退職に際して

青山 隆彦 大学院医学系研究科教授

高校生の頃、文系の科目が苦手だった私は、核物理、量子力学、原子力と言った新鮮な響きを持つ物理学の世界に魅せられ、1966年、名古屋大学工学部原子核工学科に第一期生として入学しました。時まさに日本で商業用原子力発電が始まったばかりの頃で、学科内には英気が漲っておりました。放射線の工業利用、放射能定量がご専門の渡辺 鑑先生の元へ大学4年で弟子入りし、大学院の2年間を経て研究室の助手になりました。その後20年余の間、放射線計測工学分野で新技術の開発研究を行い、1993年に医療技術短期大学部に異動してからは放射線計測の医学応用研究を始めました。医学的知識の乏しい私でしたが、医学でのニーズや色々な病院での医療用放射線機器の提供など、同僚の先生方のご助力を得て研究を進めることができました。5年後の1998年に医学部

保健学科に改組され、以後今日までの10年余は、新しく開発した高性能X線線量計を組み込んだ人体ファントムを使って、医学診断X線による患者の被ばく線量を解明する研究に、同僚の先生方及び研究室の大学院生諸君とのチームワークで精力的に取り組みました。

振り返れば40年余に及び私の研究人生は、私を育ててくれた名古屋大学とともに、恩師や諸先輩、同僚の先生方並びに指導生の皆さんのお蔭で成り立ったものです。

皆様に心から感謝いたしますとともに、名古屋大学の益々の発展を祈念しています。



## 定年退職をむかえて

小幡 康範 大学院医学系研究科教授

昭和41年に名古屋大学医学部に入学し、その後は、2年間の教養時代を東山地区で過ごしました。本山から大学を通る道路はまだ中央部のみが舗装された状態のため、雨が降ると歩くのは大変でした。3年生からは鶴舞地区に移りました。その当時の建物は全く残っていないので、当時の講義室の様子や病棟の様子はまだ記憶に残っていますが、その記憶も次第に不明瞭となりつつあります。

卒業して、昭和47年11月に医学部助手として名古屋大学で働きはじめました。その後、名古屋市内の病院にも赴任しましたが、平成2年5月に名古屋大学医療技術短期大学部に教授として戻りました。医療技術短期大学部は、平成9年10月に医学部保健学科として4年制化が実現しました。この4年制化は一番印象深いもので、カリキュラムから教員組織ま

で、夜遅くまで書類作りに追われましたが、実現した時の達成感は最高でした。医学部保健学科は平成24年度には大学院重点化も達成されるということで益々の発展を祈念します。

この3月で定年退職となるわけですが、名古屋大学には教員として合計で約28年、学生の6年も含めれば約34年という今までの生涯の半分以上を厄介になったことになりま。この間、教育や研究をかなり自由にさせていただいたことに深く感謝をし、お世話になった皆様に心よりお礼申し上げます。



## 化学物質の毒性分子基盤解析とリスク評価

那須 民江 大学院医学系研究科教授

向春の候となりましたが、研究室からはまだ冠雪した信州の山並みが望まれ、厳しい故郷の残寒を感じるこの頃です。

私は主に化学物質の毒性学を専攻してきました。中毒対応型研究は毒性学の代表的スタイルですが、予め化学物質の毒性とその分子基盤を解析し、リスク評価・リスク管理・リスクコミュニケーションに繋げる「リスク対応型研究」も社会医学においては必須です。この種の代表的な研究として、プラスチック可塑剤フタル酸ジ-2-エチルヘキシル (DEHP) の毒性分子基盤研究を行いました。2000年 IARC は DEHP の肝発がん性はペルオキシゾーム増殖剤活性化受容体 (PPAR $\alpha$ ) に関連し、その発現が極めて低いヒトでは発がん性は考えられないとして、発がん性分類を2B から3に引き下げました。その後 Environmental Health Perspectives (EHP) 上で、

賛否両論の激しい議論が交わされましたが、当時私は偶然 PPAR $\alpha$  欠損マウスにも肝腫瘍が発生することを確認しており、この発がんランク引き下げの根拠に科学的疑問をもち、名古屋大学での最初の仕事としました。結局2007年に PPAR $\alpha$  に依存しない肝臓腫瘍発生のメカニズムが私達によって報告され、2009年 IARC でエキスパート会議が開催されました。最終日に、発がん分類を見直すべき物質について討論され、DEHP はその一つでありました。翌年の2010年サマリーが EHP に、フルペーパーは Research Recommendations for Selected IARC-Classified Agents, IARC Technical Report として出されました。2011年、IARC はモノグラフ会議を開催し、DEHP の発がん分類を3から再び2B に変更しました。私にとっては至福の瞬間でした。



## 定年退職を迎えて

石田 幸男 大学院工学研究科教授

昭和41年に名古屋大学へ入学してから、学生として9年、教員としてほぼ37年が過ぎました。この長い年月をふり返りますと、いろいろなことが思い出されます。教養部の学生時代には、講義中に横道にそれ、人生訓を話される先生が多くおられ、雑談の内容だけは今でも覚えています。またそのころ、滝川事件で有名な立命館大学法学部の末川博先生の講演「学問は闘争である。」や、不確定性原理で有名なハイゼンベルク教授の講演が豊田講堂で行われました。特に後者の英語の講演は私にとってちんぷんかんぷんでしたが、「大学に入学したんだ！」という感動だけは持ったことを覚えています。4年生のときに名大でも大学紛争がはじまり、このときも、新しい発見の毎日でした。

大学院を卒業後教師となり、教養部の図学教室、工学部の

機械工学科、電子機械工学科、工学研究科の機械理工学専攻と所属は変わりましたが、研究は回転機械の振動の研究一筋で行って来ました。恩師、同僚、学生に恵まれ、研究も順調に進んで、それなりの成果をあげてきたように思います。新聞や雑誌で「荒れる教室」という記事を読むたび、優秀な学生とともに研究を楽しんで来られたことを感謝しています。

G30も始まり、大学のグローバル化が急速に進んでいます。私も留学生センター長としてこれに多少関わって来ました。今後名古屋大学が世界の一流大学として成長していくことを期待しています。



## 応物40年

井上 順一郎 大学院工学研究科教授

応用物理学専攻に入学してから40年余りになります。この間にどんな事をしたのか、できたのか、あまり強い印象が残っていませんが、この40年を敢えて4つに区切ってみます。

最初は、志水正男教授の指導のもとで学位を取る頃までです。この頃、論文テーマは自分で見つけるというのが周りの風潮でしたので、シャープな頭脳の持ち主ではない自分にとっては、研究はなかなか大変でした。ODで過ごした1年後に、周りの方々の助けて運良く志水研の教務員に採用となり、志水教授の定年まで金属磁性の研究を続けることができました。これが第2期です。第3期は、後任の前川禎通教授のもとで共同研究を行なった時期です。この時期に、酸化物超伝導・磁性、金属多層膜の磁性・伝導へと研究テーマを広

げることができました。これも大変幸運だったと思います。自分自身で研究室を主催する第4期では、半導体物理へと踏み込んで行くことになります。

研究分野がこのように広がっていった理由は、私の論理思考法が帰納法に偏っており、演繹法が苦手であるため、一つのテーマを深く追求するできなかつた為とと思っています。大学においてT型人材の育成がしばしば取り上げられます。大学教員に対しても、もっと幅が広く、深く、しかも太い線で要求されるでしょう。それをほんの一部満たすのみという結果である私ですが、多くの方々の助けによりここまで至ることができたことにお礼申し上げます。



## 名大で8年

上田 哲彦 大学院工学研究科教授

私が名古屋大学に赴任したのは4月1日に桜が満開の年でした。国立研究所であった航空宇宙技術研究所に勤め、行政構造改革を反映した組織再編がありました。長年航空宇宙構造の畑で暮らしてきました。周りの流れに身を任せ、国立大学の法人化と共に8年をここで歩ませて戴きました。これまでの個人的な務めを眺めると、何がしか7~8年ごとに新鮮な環境変化があったように思います。最終期は穏やかに教育研究に没頭する自分を描いておりました。

現実には、この地で赴任直後の万博、セントレア開港、地下鉄環状化、フランチイズ球団の優勝などに感化されたのか、結構賑やかだったように思います。絶好の機運だったと思われるのは国産初のジェット旅客機の開発時と重なったことです。航空機構造の教育研究に携わる者として、我が国の

航空機製造ものづくりの中核である中部地域でこのような機会に遭遇したのは願ってもないことでした。

このような背景をもって平成21年2月に複合材工学研究センターが発足し、さらには全国域の拠点となるナショナルコンポジットセンターが名大を核として動きだしています。これらの活動展開に関与させて戴きました。

動きだしたからにはまず前向きに進めるしかない国立大学法人化の結果の是非を論ずるのは簡単ではなく、教育研究体系の見極めを慎重に行うためにいま暫くの時間が必要と思われる。その評価は後進が問うことになるでしょう。恵まれた環境で過ごした8年間に感謝して私の最終幕を下ろします。



## 退職にあたっての雑感

河野 明廣 大学院工学研究科教授

学部・大学院の学生としての9年と合わせ46年間、ほぼ半世紀、名古屋大学にお世話になりました。学生時代は、雨の日はぬかるむ本山からの坂を上り、歩くとギシギシ音をする木造の校舎で講義を受けたが、現在居室のあるIB館は地下鉄に直結し、中庭もしゃれている。苗木のようだったグリーンベルトの木々もかなりの木陰ができるようになった。電子工学科を卒業した1970年は数十のトランジスタを含む小規模集積回路が普及しだした時期にあたるが、現在では切手大のメモリーカード中のトランジスタの数は人間の脳細胞の数を超え、学生時代、大きな部屋を占領していた計算機は手のひらサイズとなり、われわれの生活を一変させた。このような超大規模集積回路を正確に作りあげる加工技術の中心をなすのが低温プラズマであり、ブラックボックスの道具として使

われていたプラズマを学術的に堅固なものにするという研究に取り組んだ。学会におけるこの分野の立ち上げ時期から参画して、分野の急速な進展のなかで自由に研究することが許されたのは大きな幸いであった。

さて、グリーンベルトの木々が太木に育つであろうこれからの半世紀を思いやると、10桁にも及んだマイクロエレクトロニクスの量的発展が今後も持続可能とは思われず、全く新しい発想の展開が必要となる。困難だがともかく道を前に進む他は選択枝ない。若い皆さんの奮闘に期待するとともに、少しは私ももの考えてゆきたいと思う。



## 「よそ者」を受け容れる効用

佐藤 一雄 大学院工学研究科教授

私は、関東の企業研究所で24年のキャリアの後、それまでご縁がなかった名古屋大学にやってきて18年、自分で思い通り研究ができることを楽しみました。おかげで名古屋という街、その文化も知ることができました。

この短い期間でも、大学教授の仕事環境は大きく変わったと感じます。学生たちは授業以外で多くの知識をインターネットで簡単に手に入れることができ、世界中の研究者は英語論文でフラットな土俵上で競争し評価される時代になりました。これは同時に、分野の垣根を越え、国境を越え、これまでの「よそ者」と協力関係を結ぶのを容易にしました。私の専門である機械工学とは異分野の、化学・物理の専門家との協働、海外との共同研究など、異質なグループとの交流は「マイクロ・ナノ機械工学」という新しい分野の開拓に大

いに役立ちました。企業で過ごした職業生活の24年は無駄でなかったと思います。

ひとところに定着して仕事を極める人もあって良いですが、異質な人たちがもっと高い割合で混ざると、名古屋大学はさらに面白い大学になると思います。これから、学生・教員ともに海外からやってくる人たちが益々増えることは間違いなく、彼らを受け容れて名古屋大学の文化がこれからどう変わるのか興味と期待をもっています。

やりがいのある職業生活の場を与えてくれた名古屋大学、同僚諸兄、活動を支えてくれた産業界の方々、研究室スタッフ、学生・卒業生諸君に心から感謝します。



## 有意義な生活に感謝

鈴木 憲司 大学院工学研究科教授

小生は、「行革」推進で国立大学が独立行政法人化された平成16年度に産業技術総合研究所から工学研究科に赴任した。配属先は法人化と同時に設置されたエコトピア科学研究所であった。大気や水の浄化に資する環境材料の研究・開発に携わり、環境親和性の高い“ユビキタス元素”から成る原料を使用した材料開発にこだわった。“ユビキタス元素”とはクラーク数の高い元素を意味し、具体的にはSi, Al, Fe, Ca, Na, K, Mg, Ti, C等である。また、廃棄物利用を促進するために、焼却灰や鉄鋼スラグ等の使用も試みた。開発した環境材料は酸素ラジカルを発現し、酸化触媒として機能するマイエナイト及びカルシウムフェライト、気相中のハロゲンガスをトラップするソーダライト、フェライトやチタニアの微粒子を層間に保持するピラードクレイ等である。以上の

研究・開発を学生の卒業研究に組み入れ、教育を行った。教育の目標は学生の「豊かな人間性」と「活きた知識と知恵」の獲得である。「点」として有する豊富な「知識」を繋ぎ合わせて「線」、さらには「面」として整理させる。また、困難に遭遇した時に役立つ「知恵」の獲得である。そして、学生が新たな課題に挑戦するたくましさや身を付けて社会に旅立つことである。

巣立った学生の幸せを信じ、小生の本大学での有意義かつ楽しかった生活に感謝し、みなさまの今後益々のご発展を期待します。



## お礼

高井 治 大学院工学研究科教授

1992年4月1日に、本学の工学部材料プロセス工学科教授に就任以来、20年が経過しました。皆様の御陰により、無事定年を迎えることができ、心より御礼申し上げます。とりわけ、研究室の現在、過去のスタッフ、学生、関係者の皆様には大変お世話様になり、厚く感謝申し上げます。この間、首尾一貫、材料工学に関する研究を続けることができました。

赴任以来、新しい材料開発の考え方を提唱したいとのことで、『バイオメテック材料プロセッシング』に関する研究を開始しました。「生物の生み出す物質・構造・機能・プロセスなどを学び、理解し、洗練させることにより、新しい機能材料をデザインし、創製すること」との定義です。学ぶこと、理解することは大変難しく、洗練させることはおこがましいのですが、目標は高く掲げています。自分を含め、生物

の行っている(1)常温・常圧での環境負荷の少ない材料プロセス、(2)自己組織化を用いた分子レベルでの複合材料形成を学びたく始めました。透明な超はっ水膜、ソリューションプラズマプロセッシングの開発等々を行っています。

2001年よりは、毎年、バイオメテック材料プロセッシング国際シンポジウム(BMMP)を学内で開催し、今年も1月末にBMMP-12を開きました。世界の第一線の研究者に集っていただき、定評ある国際会議になりました。「継続は力なり」ではないですが、毎回新鮮みをもたせ、新しい世代に受けついでいただきます。



## ありのままに、あるがままに

竹田 美和 大学院工学研究科教授

宗教者の言葉ではありません。自然科学者として、研究するにもグループや組織を引っ張るにも、こうあるべきで、こうしかできない、との実感です。

目の前で起こっている現象を、ありのままに観察することがすべての出発点だと思います。無理に「こうあってほしい」と想定通りの現象に捻じ曲げて理解しても、結局何も得られません。組織の構成員の持てる力以上の目的を目指しても、やはり達成は無理です。もし出来たとしたら、力量を正しく見ていなかったからでしょう。こう素直に理解できるようになったのは、50歳の半ばでした。その後は、それまでの蓄積が熟して来たこともあるでしょうが、目に見える成果が出てくるようになりました。掲げたテーマ(具体的に書くスペースがありません)の成果それぞれに賞を頂き、研究者仲間に

認めて頂きました。また、研究成果が次々とものになって他の研究グループや世の中に出るようになりましたし、産学官連携担当の総長補佐として手がけた仕事が、産学官連携推進本部と赤崎記念研究館として、また現在進行形ですが、中部シンクロトン光利用施設(名大内ではシンクロトン光研究センター)として、残せるモノが出来ました。故郷の山口、大学生から教員まで京都、さらに教員として名古屋へとほぼ20年間毎に東へ東へと移動して来ましたが、名古屋からは西へ戻るつもりでしたが、当分帰さんと言われ、暫く名古屋でまだ持てる力を発揮しようと思います。



## 36年前のスタート

谷本 正幸 大学院工学研究科教授

私は昭和51年3月に東京大学大学院博士課程を修了し、同年4月に名古屋大学に着任しました。大学院時代の研究分野は半導体デバイスで、実験室で白衣を着て超高速スイッチング素子の実験を行っていました。就職の時期になったとき、旧帝大に就職したい、寒いところは苦手ですと、贅沢なことを指導教授をお願いしていましたところ、名大電気教室からお誘いがあり、幸運にも採用して頂きました。名大電気教室では情報通信分野の人材を求めていました。現在ならば、この分野ですでに実績のある人を採用するでしょう。私には情報通信分野の実績は全くありませんでしたが、電気教室は面接で私を採用してくれました。これが、私の36年に亘る名大人生の始まりです。

着任後、私は映像情報に関する研究を始めました。研究室

で年齢も余り変わらない学生と一緒に悪戦苦闘した日々を懐かしく思い出します。当時、何の実績も装置もない研究室にやってきてくれた意欲あふれる学生たちは、現在、様々な企業のトップとして活躍しています。大学に残った私は、同僚、後輩に恵まれ、日本のハイビジョン放送方式の候補となったTAT帯域圧縮方式や、世界の映像メディアの頂点に立つ自由視点テレビFTVを開発することができました。私を採用して頂いた電気教室に、少しはご恩返ししができたのではないかと思います。このごろです。



## 「勇気ある知識人」の皆さまへのお願い

橋 淳一郎 大学院工学研究科教授

1971年に大学院修士課程に入学してから41年が経過した。途中他機関で働いた7年間を除いて、34年間お世話になった名古屋大学に心よりお礼を申し上げたい。

私が教授として工学研究科に戻った1994年は、予算が年度内に成立せず学生達に迷惑をかけた。当時はバブルがはじけた直後で、口を開けばカイカク、カイカクと言われ始めた時代であった。大学もご多分に漏れず、教養部解体、大学院重点化そして独法化とカイカクは着実に進行した。カイカクのキーワードは「競争」で、大学を競争的環境に置くことで、効率良く研究成果を生みだし社会の望む人材を育成しようという狙いであったが、結果は果たしてどうであろうか。

競争とは勝負であるから、勝ち負けを決める判定基準（価値観）が必須となる。大学を大学たらしめているのは、研究

においても教育においても多様な価値観が無条件に等しく認められることなので、「競争」が大学に馴染まないことは火を見るより明らかである。そもそも新制大学は、特定の価値観（軍国主義）の押しつけに抗しきれなかった、戦前の大学制度に決別する決意を持ってスタートしたのではなかったのか。喉元を過ぎて熱さを忘れたのか、同じ轍を踏んでいるように私には思える。

カイカクが断行されて久しく、その生傷は痛々しい。生傷が致命傷になる前にカイカクを改革して下さるよう、「勇気ある知識人」である皆さまに強くお願いし、期待したい。



## 特色を生かして

中村 新男 大学院工学研究科教授

1986年4月に名古屋大学工学部へ赴任しました。ポスドク研究員として過ごした外国の大学を含めて、5つの大学に学生、教員として在籍しましたが、名古屋大学が最も長く過ごした大学になりました。その地方や国の風土・文化、歴史を反映して、それぞれの大学には特色と個性があり、人との関わりや教育・研究の在り方についてもいろいろな経験をすることができました。

大学院時代にレーザーを用いた光物性の研究を始めて以来、約40年間、光・物性・ナノをキーワードにした研究に取り組んできました。独自のアイデアや工夫を取り入れて、実験に使う装置や道具をつくることを心がけてきたつもりです。知識と科学する力を身につけていく学生と接しながら、研究室のスタッフ・学生や共同研究者の皆様とともに研究に

取り組むことができ、充実した日々を送りました。

2005年から研究・教育支援担当の総長補佐・全学技術センター技術部長として、技術支援と技術職員の組織化およびその運営に携わってきました。大学の高度な研究とそれを担う人材の育成や学生の教育は、数多くの技術スタッフによる技術支援の上に成り立っています。そのような技術の継承や技術レベルの向上、公平な技術支援サービスが、センター化によって組織的に行われつつありますが、一層の充実と発展を願っています。

名古屋大学の特色を生かしつつ、Nagoya Universityとしてさらに発展することを期待しています。



## 定年退職を迎えて

木村 真人 大学院生命農学研究科教授

東大農学部での15年余りの研究生生活の後、名古屋大学農学部に赴任して25年、定年退職の時期を迎えた。振り返ると、何の迷いもなく水田土壌生態系の研究一筋の生活であった。東大時代は東南アジアへ調査研究でしばしば出かけ、いろいろの水田稲作を見る機会に恵まれ、十分理解できないままに各地の水田で様々な現象に出会い只々記憶に残っていたように思う。名古屋大学農学部では当時の見聞・経験を背景に研究を展開した。幸いなことに、愛知県はわが国有数の工業県であるとともに農業県で水田圃場が身近にあり、愛知県農業総合試験場には世界最長の長期肥料連用試験水田が存在した。水田土壌の研究テーマに事欠かない恵まれた環境であった。加えて、様々な研究分野の先生方に気楽に研究のことで相談し、最先端の分析機器も自由に利用できた研究生生活は、

何物にも代えがたい名古屋大学の良き伝統と感謝している。

退職にあたっての懸念は近年の業績主義の蔓延である。名古屋大学もその例外でないように思われる。学生諸君、若い研究者の多くは極めて優秀であるにもかかわらず、学ぶこと、教育・研究を実施することに忙しく、自然の中で静かに研究を考える時間の大切さを忘れてるように見受けられる。身近の自然や東海の農業にもっと目を向け人生観や研究生生活に役立てられることを期待してやまない。農学関係に40年余り身を置いた者として、大学の伝統・校風は、環境・立地に育まれて教員・学生が作り上げるものと考えられる。時勢に流されず、名古屋大学の良き伝統・校風を益々発展されるよう希求してやまない。





## 定年退職を迎えるにあたって

小林 迪弘 大学院生命農学研究科教授

教員に採用されて35年、学部学生、大学院生、学振奨励研究員などを含めると46年間名古屋大学に在籍させて頂きました。この間、まともな教育研究ができたかと問われると、忸怩たるものがありますが、充実した気持ちで退職を迎えることができ、今はお世話になった先生や先輩、同僚、事務・技術職員の方々、一緒に学んだ学生諸君などへの感謝の念でいっぱいであります。

私は農学部が安城から東山キャンパスへ移転した1966年4月に入学しました。3年後の1969年には、「学園紛争」を経験し、学内外の集会やデモに友達に誘われて通っていたことを思い出します。その後、大学院生、学振奨励研究員などを経て助手に採用されましたが、当時の私の周りは、教員と学生を交えた自由で闊達な議論で溢れ、「大学の自治」や「大

学人」など、我らの名古屋大学と農学部を「建設」するための様々なキーワードが飛び交っていたことを記憶しています。

最近、大学は大きく変貌しました。とりわけ、2004年の法人化を機に、大学にも市場原理が導入され、アカデミズムの拠点とはほど遠い状態になっています。大学が拠り所を失って漂流しているかのように感じられます。このようなときに、「大学」や「大学人」の意味を改めて問い直すことは、大変に意義のあることではなかろうかと思っています。

ともあれ、名古屋大学が直面する様々な困難を乗り越え、ますます発展することを祈念しております。



## 定年退職にあたって

服部 重昭 大学院生命農学研究科教授

平成7年に農学部に着任してから17年が過ぎ、この3月末で定年退職いたします。大学を卒業し、農林水産省の研究機関で長年研究をしていましたので、大学に戻ったとき、その変貌に戸惑いました。学科組織、カリキュラムおよび研究室名称などの改変、大学院生や女子学生の増加さらに教職員の多忙化など、学生時代に描いた農学部の雰囲気は一掃されていました。その後も大学院重点化、法人化、法人評価、学部改組、予算縮減などを経験し、これからも選択と集中、競争的環境を基調とする大学改革が継続する気配を感じています。着任初期の頃に漠然と感じた「ゆとりの不足」を払拭できないまま退職することになりそうです。

このように変化の激しい環境ではありましたが、退職まで自分が目指す研究に取り組むことができたこと、学生たちと

各地の森林フィールドと一緒に歩き汗をかいたこと等に満足しています。また、この17年の間に、教育、研究、管理運営、社会貢献などを通していろいろなことを経験し学び、それまで出遭ったことがない充実した時を過ごしました。それは学生、教職員の皆さんはじめ大変多くの方々との出会いとご支援があったからであり、深く感謝しています。

最後になりましたが、名古屋大学が「自由闊達な気風」を失わず、学生や若手教職員が夢を追い続けられる環境を堅持し、ますます発展することを願っています。



## 国際開発と政治学をかけあわせる

木村 宏恒 大学院国際開発研究科教授

熊本大学法学部の国際政治学担当から名古屋大学に転勤して20年が経ちました。1989年に日本の途上国への政府開発援助が世界一の額となるとともに、語学や異文化理解だけでなく、「開発リテラシー」を持って途上国で活躍できる若い世代を養成するために、名古屋大学に大学院だけの国際開発研究科がつくられ、創設と同時に赴任したのです。途上国の開発を国際的に支援していくために、イシューベースで国際開発という言葉があったのですが、イギリスでは1960年代から多学問領域複合的な開発学という学問分野ができており、国際開発研究科では、途上国の現場と学問を併せ持つという意味で国際開発学という言葉を使うことで落ち着きました(2009年『国際開発学入門』勁草書房刊)。

私は学部・大学院で国際政治学ゼミに属し、南北問題の政

治学に取り組んできました。それも、外交政策の半分以上は各国の内政で決まる。政府の最重要課題はいかに経済を発展させ、国民を豊かにするかにある。どのような地理的状況におかれ、どのような産業構造を発展させ、人材を育成し、その結果としての政府戦略と外交があるかという観点です。その結果、『インドネシア現代政治の構造』、『フィリピン：開発・国家・NGO』、『現代世界の政治経済地図』を単著で刊行し、『国際開発学入門』と、その一分野としての『開発政治学入門』を共著で刊行し、国際ネットワークを動員して『Limits of Good Governance in Developing Countries』を刊行できました。その間、多くのゼミ生にも恵まれ、博士号も20余名に出しました。充実した20年を送ることができたことに、深く感謝します。



## 研究・教育と心の余裕

長田 博 大学院国際開発研究科教授

名古屋大学には、学生時代に6年間、教員となった1991年から21年間お世話になった。なじみの深い母校での教員生活は、一緒に働いた人たちにも恵まれ、実に快適で楽しいものであった。特に、新設の国際開発研究科での多様な経験と世界各国からの優秀な大学院生との知的交流は、私の大切な財産となったことを心から感謝している。

21年間の教員生活を振り返って、自戒を込めて思うのは、研究にも教育にも心の余裕が必要だということである。そして、良い研究と良い教育は相互に補完的で切り離すことができない。時には、ゆったりと研究全体を見渡して、物事の本質に迫っているかどうかを確認する作業が必要である。自ら振り返れば、研究がどれだけの射を射て、社会にとって意味を持ったのか、はなはだ心許ない。教育面でも、教員がどっし

りと構えて、「方向は自分で見つけるもの。見ているから思い切ってやってみよう」という雰囲気を出さないと、学生も自由な発想での研究能力を発揮しにくい。そして、やっかいなことに私のような凡人には、時間的余裕がないと、心の余裕は授からない。

最近、アカウンタビリティや評価の重要性が認識され、それ自体はよいことであろうが、世の中何かと忙しい。しかし、それは名古屋大学においては過渡的な問題となり、研究・教育業務システムの効率化がますます進み、心と時間の余裕がある研究・教育が一層発展するものと期待している。



## 定年となりました

二村 久則 大学院国際開発研究科教授

私は東京四谷にある大学に入学し、学部から大学院までそこで学びました。そして今、名古屋四谷通りにある名古屋大学に24年間奉職した後、この3月で定年となりました。たまたまですが、四谷に縁がある大学生活だったなと思います。名古屋四谷通りで過ごした日々は、私にとって素晴らしい体験でした。

四谷通りを去るにあたり、名古屋大学の素敵なところを私なりに三つ挙げてみます。まず第一に、その自由な空気と風です。名古屋大学学術憲章に「自由闊達な学風の下」という一節がありますが、名大には、学風を含めいろいろな意味で自由な風が吹いているように感じます。教職員、学生はお互い自由に語り合うことができますし、誰でもキャンパスを自由に歩き、あるいは走ることができます。学問研究の自由が

保障されていることは言うまでもありません。第二に、その開放性です。名大キャンパスは、大学としては珍しく、門がありません。大学と関係ない人、大学に用のない人でも、自由に出入りできます。近所の住民が犬を散歩させることもできますし、そうした光景は珍しくありません。門がないので門限もありません。誰でもいつでもという発想が素敵です。最後に、そしてこれが一番なのですが、素晴らしい人々が集っています。名古屋大学で私は素晴らしい同僚、事務職員の方々、学生さんに恵まれました。人こそ名古屋大学の宝です。この共同体のすべての人々に感謝して稿を閉じます。



## 表現論の流れに身をまかせ

庄司 俊明 大学院多元数理科学研究科教授

私が大学院生だった1970年代の中頃、ドリーニュトルスティックによるプレプリントが回ってきた。電子メールなどなかった当時、コピーを重ねて薄汚れたその論文は、有限簡約群の表現論に関する重要な予想を全く新しい手法で解決した劃期的な論文だった。そこで使われた幾何的手法は当時の有限群の表現論の常識を打ち破る斬新なもので、我々にはまるで天上の世界の論理のように思えたのだ。有限簡約群の表現論の最も重要な問題である、既約表現の分類とその指標の記述は、その後ルスティックの主導のもと1980年代から1990年代にかけておおむね完成した。

私は、どういう巡りあわせか研究の初期段階からルスティックの仕事につきあうことになり今に至っている。1970年代前半の深い霧に覆われた、混沌と焦燥の時代を私は懐か

しく思い出す。そこには立派な理論があり、予想もあるのに、頂きに至る道は途絶えていた。我々はなすすべもなくまどろんでいた。そしてその後激動の時代がやって来た。実際、80~90年代に表現論の多くの分野で爆発的な発展がみられ、それらを統合する新世界が嵐の中に出現したのだ。このような沸騰する時代の中で研究生を送り、多少なりとも自分の役割を果たせたことを私は幸せに思う。

私はこの3月で定年だが、数学者に定年はない。数学者は死ぬまで数学者でいるしかないので、私は自分の夢を追い続けることにしよう。



## 外国語教師としての37年を振り返って

飯田 秀敏 大学院国際言語文化研究科教授

私は1975年に当時の教養部に英語教員として奉職し、1994年からは韓国語を担当してきました。在職期間のほぼ半分ずつ英語と韓国語の教育に従事してきたのですが、そのお陰で既修外国語（英語）と未修外国語はどちらも重要であり、まさに車の両輪であることを確信することができました。

英語は世界共通語としての地歩を固めて久しく、大学教育におけるその重要性を疑う余地はないと思われまふ。国際的な商業活動も学術活動もほとんどが英語を媒体として行われています。しかし、英語の重要性が強調されるあまり英語さえできればよいとする画一的思考が支配的になりつつあることには、大いに危惧の念を抱かざるを得ません。外国語を習うことは、とりもなおさず、母語によって育まれたのとは異なる価値観に接することであり、それによって価値観の相対

化が生まれます。しかし、世界には多様な価値観が存在する以上、相対化から多様化へと向かわなければ、真の国際的視野の養成は望めません。それには、未修外国語の学習が重要な役割を果たしています。

以前、山本一良先生と外国語科目のカリキュラム改革の仕事をしていたとき、「未修外国語は大学のステータスシンボルだ」とおっしゃっていただき、感銘したことがあります。国際社会で活躍する人材を養成する任務を担う本学に、この良識がいつまでも健在であることを祈りつつお別れの言葉といたします。



## 退職にあたって

川田 稔 大学院環境学研究科教授

名古屋大学に赴任してからの16年間は、またたく間に過ぎた感じでした。

その間、充実した研究・教育環境に恵まれたことを、心から感謝しています。

ことに大学院生の指導を本格的に受け持ったことは、貴重な教育経験であったのみならず、自分の研究にとっても極めて有益なものでした。院生たちと、かなり専門的な意見の交換ができたことは、自分の研究上の考えを深化させていく上で、とても良い刺激になりました。学部学生の教育・指導のみでは、十分には得られない面だと思います。

赴任後約6年間は、情報文化学部部に所属し、人間情報学研究科を兼任していましたが、その後、環境学研究科に配置換えとなりました。残念ながら、環境学研究の中核的な分野で

の専門的な研究に本格的に取り組むことはできませんでしたが、政治思想という周辺の領域からですが、環境の問題についていろいろ考える機会を得たことは、今後の研究にとっても大きな財産になると思っています。退職にあたり、名古屋大学、環境学研究科の皆様これまでのご厚情に感謝するとともに、大学、研究科のさらなる発展を心から祈念しています。



## 41年目にやっと気づいた

木股 文昭 大学院環境学研究科教授

門前の小僧も41年、おかげで、勤労20年の銀杯もいただき、誠に感謝する。41年目の今年、ショックだが、目からうろこが落ちた。63歳定年なら、混乱のまま足を洗うところだった。

3月11日、激しい揺れが収まらないうちに、気象庁は大津波警報を発令。沿岸では辻々の防災行政無線スピーカーから避難命令が流れた。8日前に津波避難訓練を行っていた町もある。海岸線に大防潮堤が聳える。津波を思い出す前に襲われた2004年スマトラ沖地震のアチェとは全く違った。でも、私たちは2万の人々を失ってしまった。

避難命令を一刻も早く伝えるために、辻々に無線スピーカーが設けられ、東京のスイッチ一つで列島中のスピーカーから警報が鳴り響く。一方、人件費削減を盾に、役場の宿直が廃止され、防災の迅速な対応が確実に遅れるようになった。

35年前、駿河湾地震が切迫すると若い地震学者が指摘した。しかし、政府は、「次は東海地震、地震が予知でき、戒厳令下で地震に備える」と歪め、「大震法」を成立させた。当然ながら東海地震の前に大震災が阪神淡路と東日本を襲った。

木曾三川域では家の周りを高くし、軒下に舟を吊るし、水害に備えていた。でも、地震の仕組みを教えなくてよい学校教育が進み、私たちは「ただごとでない」ことから身を守るのではなく、国が警報を出したので避難となった。私たち自身で私たちを守るのが防災の原点と確認したいものだ。



## 四十而不惑

阿草 清滋 大学院情報科学研究科教授

大学入学から46年間を経た。学生から教員になり、大学以外の組織に属したことがない。その半分、23年間を名古屋大学で過ごした。名古屋大学電気系学科に赴任し、情報工学科、情報科学研究科と所属を変えた。居室も工学部3号館、9号館、そしてIB館と移った。いろいろ変化があった様にも思えるし、日々淡々と時計の針だけが進んだ様にも感じられる。

ソフトウェア工学の研究を始めてしばらくした時に、大手企業の取締役の方に、「先生、僕らも忙しいのだから、現場で使えそうなものか、単に論文のためのものか分かる様に、概要の書き出しだけで分かる様にしてもらえませんか」といわれたことがある。論文のための論文に反省する一方、現場の期待感を感じて、科学を現場に適用する工学の研究に

夢を持った。しかし、そもそもソフトウェアは工学の対象になりうるのかという疑問が、研究を進めるとともに、徐々に湧いてきた。ソフトウェア科学はソフトウェア工学の基盤でありうるか。ソフトウェア開発の属人性は排除できるのだろうか。

それでも、30数年の研究でソフトウェア工学のベースとなるプラットフォームを整備してきて、やっといくつかの開発現場で使ってもらえるところまでは来た。計算機の世界で用いられる16進数で言えば、64歳は40歳であり、論語では「四十にして惑はず」である。

ソフトウェア工学もあり得ると信じて、もう少しソフトウェアに関して学ぶこととしよう。



## 宇宙天気研究を振り返って

菊池 崇 太陽地球環境研究所教授

1976年に郵政省電波研究所（現独立行政法人情報通信研究機構 NICT）に奉職し、2005年に名古屋大学に移って、地球近傍の宇宙空間で発生するオーロラや磁気嵐などの宇宙天気現象の研究をおこなってきました。36年に及び研究生生活の締めくくりの7年間を名古屋大学で送り、学生教育にも携わることができたことは実り多く楽しいものでした。NICT時代には、南極に越冬したり、アラスカでレーダーを建設したり、ブラジルに磁力計を設置するなど野外活動が多く、また、宇宙天気予報の業務にも従事しました。名大に移り、念願の宇宙天気の基礎的研究と学生の教育に専念する機会をいただきました。7年という短い期間ではありましたが、大変実りある充実したものでした。

宇宙天気研究という性格上、太陽面現象からオーロラまで

多くのデータに接し、それらの因果関係を推理するのは楽しいものです。何も知らなかった学生がそのうち専門家のように説明してくれるのを見るのも楽しいことのひとつです。おもしろい事象にもたくさん巡り会いました。最初に見たオーロラがコロラド州ボルダーの真っ赤なオーロラ、最近では、NHK番組『宇宙の渚』に出演して見た宇宙ステーションからの実況中継オーロラが印象的でした。退職後もこれまでの経験を研究や教育に役立てたいと考えています。

世界的に見てもユニークな太陽地球環境の研究所がますます発展されるよう願って止みません。



## 名古屋大学での10年

安成 哲三 地球水循環研究センター教授

私が名古屋大学に異動してからちょうど10年になります。20年間勤務した前任の大学では、研究・教育を含め、大変忙しい日々であったため、本学では、勤務が研究センターでもあり、少しのんびりしたいと思っていました。

しかし赴任早々、21世紀 COE プログラムに地球科学関係で出そうということになり、拠点リーダーを仰せつかり、そんな淡い期待は外れてしまいました。しかし、幸い採択されて、環境学研究科、太陽地球環境研究所などの研究・教育の連携を実質的に進めることができ、分野を乗り越えた学際的な地球の研究を進めたいと思っていた私には、楽しい5年間でした。このプログラムが終了して1年後、今度はグローバル COE プログラムに申請し、これまた、幸い採択されました。このプログラムは、文・農・理・工などの連携で、真

の環境学研究与教育をめざそうというチャレンジングなもので、今もなお、いろいろと問題も抱えています。関係教員、研究者、学生の協力で少しずつ進んでいます。

これらのプログラム等を通して、地球科学、環境学では、異なる分野の教員・研究者が自由に議論でき、学際的な連携・協力が非常にやりやすくなりました。緑多いキャンパスの中で、この雰囲気さをさらに発展させ、世界の Nagoya University になることを期待しています。



## 年代測定総合研究センターに勤めて

鈴木 和博 年代測定総合研究センター教授

年代測定総合研究センターで12年、理学部・理学研究科で21年、大学院・研究生を合わせると都合39年間も名古屋大学に在籍しました。この間における多くの人々との出会いとさまざまな出来事のすべてに感慨を憶えます。なかでも、私の転換点になったのが2000年のセンターへの配置換えでした。

理学部・理学研究科では地質調査に軸足を置いて岩石の成因の解明に携わり、その一環でEPMAを使ったCHIME地質年代測定法を開発しておりました。この年代測定の開発が配置換えの契機ですが、私自身は必然的に岩石学から分野融合へと展開しました。大学の中で異質な分野に堂々と挑戦できる機会を得たのです。センター内あるいはCOE「同位体が拓く未来」において、碇石の産地同定に基づく元寇船の造船地、地名・地変を利用した内陸巨大地震の解析、大垣市金

生山の赤鉄鉱鉱床と古代製鉄、里山からキツネが消えた日、紙の地球科学的編年などの共同研究を実施して、実に多くの収穫がありました。今世紀になってから、CHIME法が高空間分解能な地質年代測定法として国際的に評価され、諸外国との多くの共同研究と激しい競争が同時に進んでいます。ブレードスルーの新技术を創案して手作りで実証するのは苦でもあり楽しみでもありました。これを支えていただいた多くの先生、先輩、同僚や学生の皆様に感謝申し上げます。名古屋大学の益々の発展を心よりお祈りいたします。

## 本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成24年1月15日～2月15日]

記事	月日	新聞等名
1 小澤正直情報科学研究科教授の不確定性原理を示す数式を書き換える予測が、長谷川祐司ウィーン工科大学准教授との共同研究による実験で確認された	1.16 (月) 1.22 (月) 1.23 (火)	朝日 (朝刊) 他4社 読売 朝日 (朝刊) 日刊工業
2 現代日本誤百科 (554) : 「左遷させられる」 町田 健文学研究科教授	1.16 (月)	中日 (朝刊)
3 名誉県民が語る：野依良治本学特別教授	1.16 (月)	中日 (朝刊)
4 第9回キャンパスベンチャーグランプリ中部 大賞 大俣友佳さん情報化学部学生他・特別賞中部経済連合会会長賞 松嶋大輔さん経済学部学生他・特別賞名古屋商工会議所会頭賞 周 いさん文学部学生	1.16 (月) 2. 1 (水)	日刊工業 日刊工業
5 皇后杯第30回都道府県対抗女子駅伝 鈴木亜由子さん本学学生が出演し、愛知県6位入賞	1.16 (月)	中日 (朝刊)
6 現代日本誤百科 (555) : 「隔年ごと」に開催 町田 健文学研究科教授	1.17 (火)	中日 (朝刊)
7 林 良敬環境医学研究所准教授らの研究グループはグルカゴンがアミノ酸や水溶性ビタミンであるニコチンアミドの代謝の制御機能を持つことを解明	1.17 (火)	日刊工業
8 鷲谷 威減災連携研究センター教授は地震発生確率について予測は目安であり過信しないでと語る	1.17 (火)	朝日 (朝刊)
9 内田 良教育発達科学研究科准教授は武道が必修化されるにあたり「首の筋力などが未発達なうちに安易に立ち技や乱取りを行わせるのは危険」と警鐘をならす	1.17 (火)	読売
10 素粒子宇宙起源研究機構長に益川敏英本学特別教授を再任	1.17 (火)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
11 第6回NAGOYAからのニッポン復活応援シンポジウム 非常時における地域医療のあり方「平時からの協力・連携体制が役立つ」開催：松田直之医学系研究科教授が司会を務める	1.17 (火)	日経 (朝刊)
12 筋炎医療講演会開催：2月5日 室 慶直医学系研究科准教授が講演	1.17 (火) 1.24 (火)	中日 (朝刊) 中日 (朝刊)
13 学生之新聞：人生を変えた「言葉」稲垣佐也加さん本学大学院生は「どっちもやればいいじゃないか!」、河村知拓さん本学学生は「言葉には力がある」を選ぶ	1.17 (火)	中日 (朝刊)
14 現代日本誤百科 (556) : 「まんまとうまくいった」 町田 健文学研究科教授	1.18 (水)	中日 (朝刊)
15 公開シンポジウム「花祭の保存・伝承と地域連携」開催：21日、22日 佐々木重洋文学研究科准教授がすべての花祭りを映像に収め、その意義と課題を話し合う	1.18 (水) 1.19 (木) 2.14 (火)	朝日 (朝刊) 中日 (朝刊) 中日 (朝刊)
16 名古屋大学レクチャー2012公開講演会「日本文学と日本文化をめぐって語る」開催：2月11日 ドナルド・キーンコロンビア大学名誉教授が講演	1.18 (水) 2.12 (日)	読売 中日 (朝刊) 読売
17 東海がんプロフェッショナル養成プラン医学部附属病院平成23年度市民公開講座「ここまで進んだがん治療」開催：2月5日 満間綾子医学系研究科特任助教が講演	1.18 (水)	中日 (朝刊)
18 故辻 佐保子本学名誉教授の「辻邦生のために」「『たえず書く人』辻邦生と暮らして」が取り上げられる	1.18 (水)	中日 (朝刊)
19 第42回全日本学生将棋団体対抗戦：本学9位	1.18 (水)	朝日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成24年1月15日～2月15日]

記事	月日	新聞等名
20	1.18 (水)	中日 (夕刊)
21	1.19 (木)	中日 (朝刊)
22	1.19 (木)	中日 (朝刊)
23	1.19 (木)	中日 (朝刊) 他2社 日刊工業
24	1.19 (木)	日刊工業
25	1.19 (木)	中日 (朝刊)
	1.20 (金)	朝日 (朝刊)
26	1.19 (木)	読売
27	1.19 (木)	中日 (朝刊)
28	1.19 (木)	中日 (朝刊)
29	1.19 (木)	中日 (朝刊)
30	1.19 (金)	中日 (夕刊)
31	1.19 (金)	中日 (夕刊)
32	1.20 (金)	日刊工業
33	1.20 (金)	読売
34	1.20 (金)	日経 (朝刊)
35	1.20 (金)	読売
	2. 4 (土)	中日 (朝刊)
36	1.21 (土)	中日 (朝刊)
37	1.21 (土)	朝日 (朝刊)
38	1.21 (土)	中日 (朝刊)
39	1.21 (土)	中日 (朝刊)
	1.27 (金)	
40	1.21 (土)	中日 (朝刊)
41	1.21 (土)	中日 (朝刊)
42	1.22 (日)	朝日 (朝刊)
43	1.22 (日)	朝日 (朝刊)
44	1.22 (日)	北海道
45	1.23 (月)	読売
46	1.24 (火)	中日 (朝刊)
47	1.24 (火)	日刊工業
48	1.25 (水)	中日 (朝刊)
49	1.24 (火)	中日 (朝刊)
50	1.24 (火)	中日 (朝刊)
51	1.25 (水)	中日 (朝刊)
52	1.25 (水)	日刊工業
53	1.25 (水)	朝日 (朝刊)
54	1.26 (木)	中日 (朝刊)
55	1.25 (水)	朝日 (夕刊)
56	1.26 (木)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
57	1.26 (木)	読売
58	1.26 (木)	中日 (朝刊)
59	1.26 (木)	中日 (夕刊)
60	1.26 (木)	日経 (夕刊)
61	1.27 (金)	日刊工業

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成24年 1月15日～2月15日]

記事	月日	新聞等名
62 池上 彰の新聞ななめ読みにおいて、不確定性原理を覆す小澤正直情報科学研究科教授の研究チームの発表について新聞の見出しで印象が様変わりすると紹介される	1.27 (金)	朝日 (朝刊)
63 第19回 spcafé「無意識的なものの社会科学」開催：31日 布施 哲国際言語文化研究科准教授が講演	1.27 (金)	中日 (朝刊)
64 天文学講演会「なんてんに広がれ宇宙ロマン18」開催：2月4日 福井康雄理学研究科教授が講演	1.27 (金) 2. 2 (木) 2. 3 (金)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊) 読売 毎日 (朝刊)
65 アイシン・エイ・ダブリュ株式会社代表取締役社長に川本 睦氏本学卒業生	1.27 (金)	読売 他3社
66 小松 尚環境学研究科准教授の研究室の学生たちや千種区などが協働するまちづくりグループ「千の種あかし隊」が区名をもじって制作した「千の種かるた」が紹介される	1.27 (金)	朝日 (夕刊)
67 内田 良教育発達科学研究科准教授は武道必修化にあたり柔道について「運動の激しさは部活より授業のほうが低い が実は死亡事故と紙一重」と語る	1.28 (土)	朝日 (朝刊)
68 国立大学2次試験の中間出願状況が発表され、本学は前期の志願者1,395人、倍率0.8倍と例年よりやや早めの出足となる	1.28 (土)	毎日 (朝刊) 他2社
69 濱口総長は「幸せの新聞」500号記念にあたり「私の幸せ」について語る	1.29 (日)	読売
70 赤崎 勇本学特別教授の文化勲章受章祝賀会が開催された	1.29 (日)	中日 (朝刊)
71 佐々木美和医学部附属病院チャイルド・ライフ・スペシャリストは鶴舞キャンパスで建設準備が進められている病 気の子どもと付き添いの家族のための滞在施設「ドナルド・マクドナルド・ハウス」の必要性について話す	1.29 (日)	朝日 (朝刊)
72 現代日本誤百科 (562)：「ジャンプを初めて成功」町田 健文学研究科教授	1.30 (月)	中日 (朝刊)
73 鷺谷 威減災連携研究センター教授は東海地震の「前兆滑り」について「数日前に顕著な前兆滑りが現れた例はな い。滑りが何年もかけてゆっくりすすむのであれば検出して予知するのは不可能」と指摘する	1.30 (月)	中日 (朝刊)
74 博物館体験ワークショップ「石器から学ぶ文化と自然－顕微鏡で見る石器」開催：2月11日	1.30 (月)	中日 (夕刊)
75 現代日本誤百科 (563)：昔の「人気商品ついに復刻」へ 町田 健文学研究科教授	1.31 (月)	中日 (朝刊)
76 訃報：久世敏雄本学名誉教授	1.31 (火)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
77 第36回堀川文化講座「後藤新平と名古屋－近代医学と社会政策－」において後藤氏が医学部附属病院の前身となる 愛知県病院にて医学校長、病院長を務めた経歴が紹介される	1.31 (火)	中日 (朝刊)
78 医学部附属病院に2013年に新訓練施設「メディカルシミュレーションセンター (仮称)」が誕生する	2. 1 (水)	中日 (朝刊)
79 現代日本誤百科 (564)：「過大な賠償金」町田 健文学研究科教授	2. 1 (水)	中日 (朝刊)
80 「時のおもり」において小澤正直情報科学研究科教授のハイゼンベルクの不確定性原理を書き換える不等式が紹介さ れる	2. 1 (水)	中日 (朝刊)
81 本学の駅伝チームが第66回名古屋競走大会に出場するチームの一つとして紹介される	2. 1 (水)	中日 (朝刊)
82 濱口総長は秋入学について「インパクトは大きい、大学が何を目標にしているのか、議論が必要」と述べる	2. 2 (木)	朝日 (朝刊)
83 現代日本誤百科 (565)：「ゴール奪えずも存在感」町田 健文学研究科教授	2. 2 (木)	中日 (朝刊)
84 本学の国立大学2次試験出願状況が掲載される	2. 2 (木)	日経 (朝刊) 他2社
85 忍久保 洋工学研究科教授「ポルフィリン系機能性分子の革新的な合成手法の開発」が第8回 (平成23年度) 日本 学術振興会賞を受賞	2. 2 (木)	日刊工業
86 医学系研究科長に高橋雅英同教授を選出	2. 2 (木)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
87 塩村 耕文学研究科教授は現代においてもなお響く井原西鶴の言説の意義を述べる	2. 2 (木)	産経
88 第2回次世代自動車公開シンポジウム「超軽量化技術の深化をめざして」開催：3月12日	2. 2 (木)	日刊工業
89 佐分理事は名古屋経済大学の副学長に、佐々木雄太本学名誉教授は同学長に選出された	2. 3 (金)	中日 (朝刊) 毎日 (朝刊)
90 紙つぶて：ひらめきの瞬間 篠原久典理学研究科教授	2. 3 (金)	中日 (夕刊)
91 福和伸夫減災連携研究センター教授が助言し、愛知県教育委員会は「地震防災教育パンフレット」を作成	2. 3 (金)	読売
92 「環境と映像広告」シンポジウム開催：10日 山下博美環境学研究科 COE 特任准教授が講演	2. 3 (金) 2. 9 (木)	中日 (朝刊) 日刊工業
93 研究室探訪：サッカーロボットの研究をする愛知県立大学情報科学部教授 成瀬 正氏本学卒業生	2. 3 (金)	読売
94 東海地区国立大学の最終出願状況が掲載される	2. 3 (金)	日刊工業
95 本学は中国・韓国の5つの大学と連携して学生の相互派遣をし、将来は日中韓の法情報データベース構築や法令用 語の共通化を目指す	2. 3 (金)	日経 (夕刊)
96 竹内恒夫環境学研究科教授はESD (Education for Sustainable Development) をきっかけに名古屋を「人づくり」の 拠点にしたいと語る	2. 4 (土)	中日 (朝刊)
97 京都産業大学益川塾第2回シンポジウム「科学と社会」が開催され、益川敏英本学特別教授が山中伸弥京都大学教 授と対談	2. 4 (土)	読売
98 内田 良教育発達科学研究科准教授の柔道事故についての調査が武道必修化関連記事で取り上げられる	2. 5 (日)	読売
99 病院の実力：小児救急 医学部附属病院の実績が取り上げられる	2. 5 (日)	読売
100 悼む：故辻 佐保子本学名誉教授	2. 5 (日)	毎日 (朝刊)
101 現代日本誤百科 (566)：「異なった立場を乗り越えて」町田 健文学研究科教授	2. 6 (日)	中日 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成24年 1月15日～2月15日]

記事	月日	新聞等名
102 福島和彦生命農学研究所教授らの研究グループは木質バイオマス成分の構造・分布を同時測定できる技術を開発	2. 6 (日)	日刊工業
103 石井拓児教育発達科学研究科助教は「大阪維新の会」の教育基本条例案について競争激化、格差拡大を懸念する	2. 6 (月)	毎日 (朝刊)
104 問われる大学の価値：潮木守一本学名誉教授は「大学を生涯を通じ関わる場にしていこう」と語る	2. 6 (月)	読売
105 第66回名岐駅伝競走大会：本学が16位	2. 6 (月)	中日 (朝刊)
106 現代日本誤百科 (567)：「リスクに勝つためのソリューション」町田 健文学研究科教授	2. 7 (火)	中日 (朝刊)
107 佐藤憲昭理学研究科教授は京都大学、東北大学の研究グループと共同で磁石であると同時に超伝導にもなる珍しいウラン化合物が、磁石の性質を利用して超伝導になっていることを解明	2. 7 (火)	中日 (朝刊)
108 研究室発：菱川明栄理学研究科教授「光で原子や分子の反応を自由に操りたい」	2. 7 (火)	中日 (朝刊)
109 腎臓から考える健康ライフセミナー開催：3月10日 丸山彰一医学系研究科准教授が「腎臓を守って動脈硬化を予防しよう」をテーマに講演	2. 7 (火) 2.11 (土) 2.15 (水)	朝日 (夕刊) 朝日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
110 現代日本誤百科 (568)：「シュールなファッション」町田 健文学研究科教授	2. 8 (水)	中日 (朝刊)
111 長尾能雅医学部附属病院教授は死因究明事業について「第三者まかせではなく院内調査も欠かせないが並行調査は非効率」と語る	2. 8 (水)	読売
112 池内 了本学名誉教授は原子力発電について脱原発が稼働を続けるより経済的と述べる	2. 8 (水)	中日 (朝刊)
113 名古屋商工会議所セミナー「医療現場での開発・研究課題の実例」開催：17日 松尾清一医学部附属病院院長ほか手術器具、検査機器の必要性を発表	2. 8 (水)	中日 (朝刊)
114 名大博物館に行こう！：11日、17日開催 教員、大学院生によるギャラリートัวร์	2. 8 (水) 2. 9 (木)	中日 (朝刊) 中日 (夕刊)
115 第8回毎日大学フォーラム：本学の産学・地域連携が紹介される	2. 8 (水)	毎日 (朝刊)
116 現代日本誤百科 (569)：相手に「流れを渡さない」町田 健文学研究科教授	2. 9 (木)	中日 (朝刊)
117 津波到着時間について川崎浩司工学研究科准教授のシミュレーションと市民の認識にはズレがあることが判明	2. 9 (木)	中日 (朝刊)
118 益川敏英本学特別教授は東海中学・高等学校が開催する土曜市民公開講座「サタデープログラム20th」において講師を務める	2. 9 (木) 2.11 (土)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
119 「東区・地震を考える集い」開催：11日 飛田 潤減災連携研究センター教授が講演	2. 9 (木)	中日 (朝刊)
120 博物館コンサート「早春の音楽会」開催：18日	2. 9 (木) 2.14 (火)	中日 (朝刊) 中日 (朝刊)
121 博物館サテライト展示「東山キャンパスの野鳥写真展」開催：2月6日～3月23日	2. 9 (木)	中日 (朝刊)
122 濱口総長は中京独立戦略本部の初会合で「若者の才能が生かされる地域にしてほしい」などの意見を述べる	2. 9 (木) 2.10 (金)	朝日 (夕刊) 他2社 中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
123 毎日新聞にのぞむ：益川敏英本学特別教授が新聞の読み方について語る	2. 9 (木)	毎日 (朝刊)
124 紙つぶて：「受験生、頑張れ！」篠原久典理学研究科教授	2. 9 (木)	中日 (夕刊)
125 ニュースな人ヒト：小澤正直情報科学研究科教授が紹介される	2. 9 (木)	日経 (夕刊)
126 濱口総長は愛知学長懇話会で「東大の問題提起は理解できるが、移行期のコストが問題」と指摘	2.10 (金)	毎日 (朝刊) 中日 (朝刊)
127 竹中康司工学研究科准教授は熱膨張の小さい樹脂複合材を開発	2.10 (金)	日刊工業
128 防災・減災：福和伸夫減災連携研究センター教授が名古屋の官庁街の防災拠点としての地理的状況について解説する	2.10 (金)	読売
129 本学法学部に短期留学中のアンドリュー・マクマホンさんが、法学研究科ほかで開催された読売新聞特別講座の感想を寄せる	2.10 (金)	読売
130 鈴木亜由子さん本学2年生が大幸財団丹羽奨励体育・スポーツ部門に選ばれる	2.10 (金)	中日 (朝刊)
131 福島和彦生命農学研究所教授らは「リグニン」を観察する新たな技術を開発	2.11 (土)	中日 (朝刊)
132 2012国際協同組合年キックオフイベント開催：1月13日 生源寺真一生命農学研究所教授がパネリストとして出席	2.11 (土)	朝日 (朝刊)
133 隈本邦彦減災連携研究センター客員教授は東京大地震研究所の首都直下型地震「4年で70%」の予測について「警鐘を鳴らす報道続けて」と語る	2.11 (土)	朝日 (朝刊)
134 地球を読む：野依良治本学特別教授は科学の開国について「国益を産む戦略と体制、多様な人材の確保が重要」と語る	2.12 (日)	読売
135 本学アイソトープ総合センターは千種区消防表彰式で消防協力者として感謝状を送られる	2.12 (日)	中日 (朝刊)
136 中京都考：濱口総長は「中京都構想を通じてこの地域の實力をアピールし投資を呼び込みたい」と語る	2.14 (火)	読売
137 現代日本誤百科 (570)：首相が「退陣を打ち出す」まで 町田 健文学研究科教授	2.14 (火)	中日 (朝刊)
138 西村浩一環境学研究科教授とブータン政府などでつくる国際研究グループはブータン国において氷河が26年で溶けて氷河湖に変貌したことを突き止めた	2.14 (火)	読売
139 医人伝：あさみ耳鼻咽喉科医院長 土井清考氏元医学部附属病院医師	2.14 (火)	中日 (朝刊)
140 現代日本誤百科 (571)：「放射能に汚染の廃棄物」町田 健文学研究科教授	2.15 (水)	中日 (朝刊)
141 あいち産業科学技術総合センターオープン記念講演会で益川敏英本学特別教授は「現代社会と科学」をテーマに講演した	2.15 (水)	日経 (朝刊) 他2社
142 声の欄：「秋入学、慎重な名大にエール」	2.15 (水)	朝日 (朝刊)



## イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

**2月6日(月)～3月23日(金)**

場 所：野外観察園展示室

時 間：10:00～16:00

休 館 日：土・日曜日および祝日

入 場 料：無料

博物館サテライト展示

「東山キャンパスの野鳥写真展」

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

**3月6日(火)～3月30日(金)**

場 所：医学部附属病院中央診療棟2階

リハビリ広場

時 間：終日

休 館 日：土・日曜日および祝日

入 場 料：無料

ボタニカルアート作品展 in 医学部

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

**3月10日(土)～4月14日(土)**

**3月11日(日)は臨時閉館**

場 所：博物館展示室

時 間：10:00～16:00

休 館 日：日・月曜日

入 場 料：無料

第23回博物館企画展

「吉崎誠海藻コレクション 震災と標本レスキュー」

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

**3月16日(金)**

場 所：ES 総合館4階講評室

時 間：15:00～18:00

対 象：一般

参 加 費：無料

構造家・新谷真人講演会

「建築における合理性とは何か考える」

講演題目：「これまでの研究成果と構造設計について」

講演者：新谷真人氏（早稲田大学特任教授）

[問い合わせ先]

環境学研究科

助教 吉田友紀子 052-789-3431



**3月17日(土)～8月31日(金)**

場 所：博物館展示室

時 間：10:00～16:00

休 館 日：日・月曜日

入 場 料：無料

第16回博物館特別展「大モンゴル展」

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

### 【訂正とお詫び】

名大トピックス224号（2012年1月発行）及び225号（2012年2月発行）で以下の誤りがありましたので、深くお詫び申し上げますとともに、下記のとおり訂正させていただきます。

224号9ページ・上「濱口総長がグダニスク医科大学から名誉博士号を授与される」右列9行目

【誤】 ポプキンス同大学教授

【正】 ポビニギス同大学教授

225号3ページ「ベトナムで日本法教育研究センター開所式等を挙る」左列13行目

【誤】 モンゴル タシケント

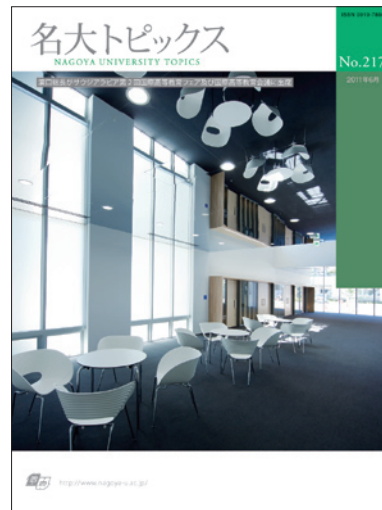
【正】 ウズベキスタン タシケント



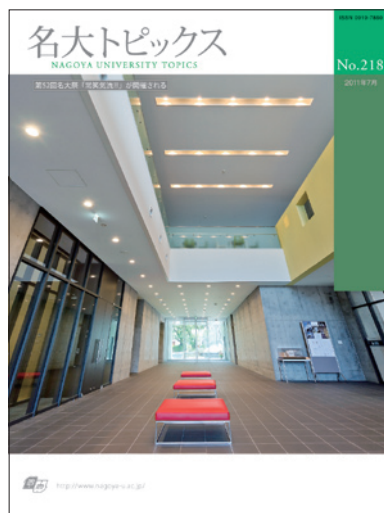
215号 (2011年 4月)  
豊田講堂 2階ギャラリー



216号 (2011年 5月)  
赤崎記念研究館 1階展示室



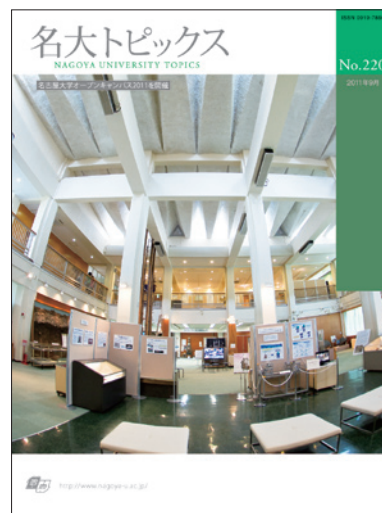
217号 (2011年 6月)  
理学南館 1階坂田・平田ホール



218号 (2011年 7月)  
ES 総合館 1階ロビー



219号 (2011年 8月)  
プール



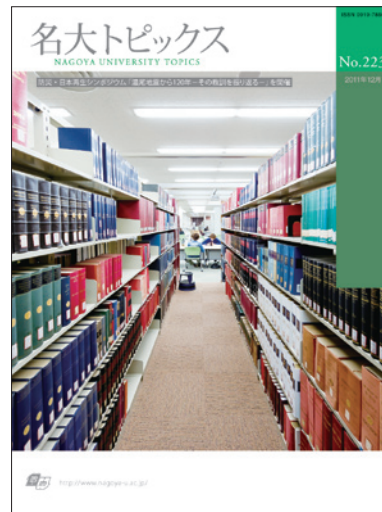
220号 (2011年 9月)  
博物館展示室



221号 (2011年10月)  
2008年ノーベル物理学賞・化学賞展示室



222号 (2011年11月)  
野依記念物質科学研究館2階  
ケミストリーギャラリー



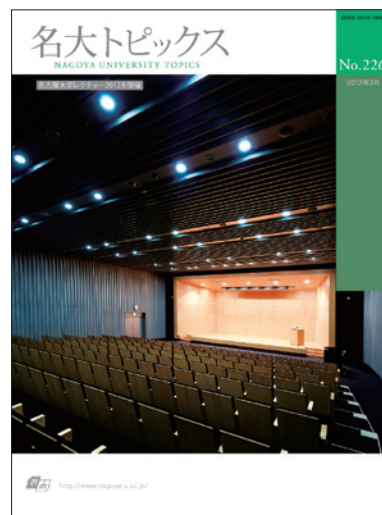
223号 (2011年12月)  
中央図書館



224号 (2012年1月)  
医学部附属病院外来診療棟



225号 (2012年2月)  
南部食堂



226号 (2012年3月)  
野依記念学術交流館カンファレンスホール

名大トピックス No.224 平成24年3月15日発行  
編集・発行/名古屋大学広報室  
本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。  
名古屋市千種区不老町 (〒464-8601)  
TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ  
(<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>) でもご覧いただけます。

表紙

野依記念学術交流館  
カンファレンスホール  
(平成24年2月20日)



## 119 第12代総長 <sup>ひらのしんいち</sup> 平野眞一 — 名大をひきいた人びと⑱ —

第12代総長の平野眞一は、1942(昭和17)年、現在の愛知県知多郡美浜町に生まれました。65年に名古屋大学工学部応用化学科を卒業、70年に大学院工学研究科博士課程を修了すると同時に東工大材料研究所助手となり、アメリカのペンシルバニア州立大学博士研究員をへて、76年に東工大助教授に就任します。そして78年に工学部助教授として名大にもどってきました。83年に教授、その後は高温エネルギー変換研究センター長、先端技術共同研究センター長、工学研究科長を歴任しました。

そして2004(平成16)年4月1日、名大が国立大学法人として再出発すると同時に、平野総長が誕生しました。法人化後は、総長と7名の理事からなる役員会が大きな経営責任を負うことになり、総長の果たす役割もこれまで以上に大きくなりました。国からの運営費交付金が年々削減されるなか、平野総長はさまざまな事業に取り組みました。

研究組織の面では、エコトピア科学研究所(大学附置研

究所)の設置(2006年)、7名の世界的な研究者からなる国際ショナルアドバイザーボード(国際諮問委員会)の設置(2005年)などが挙げられます。また、「共同大学院創業科学研究科」構想を立ち上げました。これは、本年4月に名大に大学院創業科学研究科が設置される形で結実しようとしています。

運営組織では、国際交流協力推進本部、情報連携統括本部、環境安全衛生推進本部、総合企画室、広報室などの運営支援組織を整備しました。

また、社会連携の面では、2005年に第1回ホームカミングデイを開催しました。以後、ほぼ毎年開催され、同窓生のみならず、地域住民や学生の家族などにも広く門戸を開いた、特色あるイベントとして定着しつつあります。さらに、創立70周年記念事業の1つとして、2006年に名古屋大学基金を創設しました。



- 1 平野眞一第12代総長(1942-)。2009年3月に任期満了で退任し、独立行政法人大学評価・学位授与機構の機構長に就任した。
- 2 「国立大学法人名古屋大学」の看板除幕(2004年4月1日)。
- 3 施設面では、何と言っても豊田講堂の全面改修・増築工事がおこなわれ、2007年12月に竣工したことが大きな出来事であった(写真は改修工事中の豊田講堂)。そのほか、2006年には赤崎記念研究館が竣工した。
- 4 2008年に名大関係者3人が同時にノーベル賞を受賞したビッグニュースは記憶に新しい。写真は、その授賞式がおこなわれたストックホルムでのもの(2008年12月)。
- 5 平野総長は、2006年にアメリカセラミック学会の最高栄誉賞を最年少で受賞した(写真は表彰状)。国内外での多くの受賞歴のほか、国際セラミック連盟や日本セラミックス協会の会長なども歴任するなど、セラミックス研究の世界的権威として著名である。

1	2	3
4	5	